津山市埋蔵文化財発掘調査報告第52集

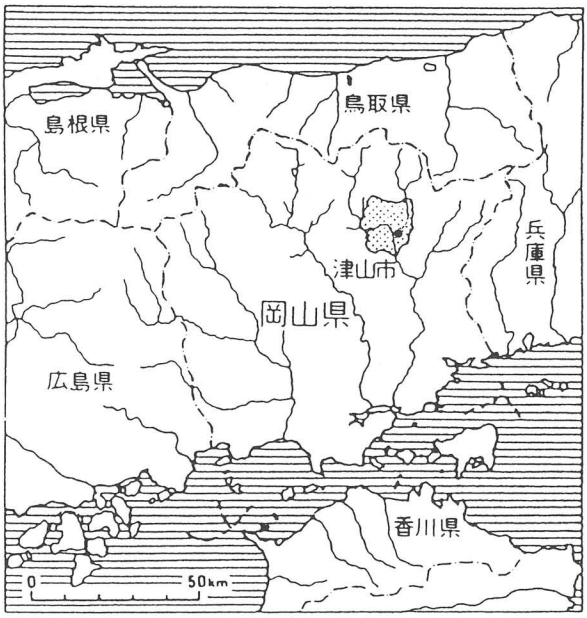
井口車塚古墳

1994

津山市教育委員会

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第52集

井口車塚古墳



1994

津山市教育委員会

序

井口車塚古墳は、津山市街地の東部を流れる加茂川流域にある古墳であります。全長は35m、帆立貝の形をした古墳として、現在は市指定の史跡となっております。

今回の調査は、比較的良好に残っている墳丘の規模や構造などを確認するための基礎調査であります。調査の結果、埋葬施設については後世に破壊を受けているためほとんど残っていませんでしたが、墳丘の構造や周溝、葺石、埴輪などの良好な出土状況を確認することができました。また、出土した埴輪の中には人物や家、盾などの形をした形象埴輪も多数出土し、美作地方においては貴重な資料と言えます。これら資料は、美作地方の古墳研究に大いに役立つものと期待されます。

なお、末筆ではございますが発掘調査から報告書作成に至るまで、多大なる御協力をいただいた関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成6年3月31日

津山市教育委員会

教育長　藤原修己

例　言

1．本書は、井口車塚（いのくちくるまづか）古墳の確認調査報告書である。また古墳の名称については、本来は3基からなる古墳群中の1号墳に相当するが、本書では従来から使用されている俗称（井口車塚古墳）を用いている。

1．確認調査は、津山市教育委員会文化課・津山弥生の里文化財センター主事小郷利幸が主として担当し、同主事平岡正宏、牧野博各諸氏の協力を得た。調査は、平成4年5月27日から6月25日、9月21日から12月17日、平成5年3月4日から5日の3次にわけて実施した。

1．本書に用いたレベル高は海抜高、また方位は磁北である。

1．本書第1図に使用した「周辺主要遺跡分布図」は建設省国土地理院発行5万分の1「津山東部」を複製したものである。

1．本書の執筆・編集は小郷、出土遺物の拓本は文化財センター所長須江尚志、実測は野上恭子、出土遺物の写真撮影及び焼付けは岩本えり子各諸氏が担当した。

1．発掘調査及び遺物整理には津山市森林組合、津山市シルバー人材センター、文化財センター江見祥生、家元博子各諸氏の協力を得た。

1．出土遺物・図面等は津山弥生の里文化財センター（岡山県津山市沼600－1）で保管している。

本文目次

Ⅰ　遺跡の立地と周辺の遺跡……1
　1　遺跡の立地と遍歴……1
　2　周辺の遺跡……1
Ⅱ　調査の経過……4
　1　調査経過……4
　2　調査体制……4
Ⅲ　調査の記録……7
　1　各トレンチの概要……7
　2　出土遺物……12
Ⅳ　まとめ……21

挿図目次

第1図　周辺主要遺跡分布図……2
第2図　井口車塚古墳周辺古墳群分布図…3
第3図　井口車塚古墳墳丘測量図……5～6
第4図　北トレンチ平・断面図……8
第5図　東トレンチ平・断面図……9
第6図　南トレンチ平・断面図及び土層図…10
第7図　西トレンチ平・断面図及び土層図…11
第8図　井口車塚古墳墳丘断面図……12
第9図　出土遺物（1）……14
第10図　出土遺物（2）……15
第11図　出土遺物（3）……16
第12図　出土遺物（4）……17
第13図　出土遺物（5）……18
第14図　出土遺物（6）……19
第15図　出土遺物（7）……20
第16図　井口車塚古墳墳丘復元図……21

表目次

第1表　岡山県内帆立貝形古墳（造出し付き円墳含む）一覧表……23～24

Ⅰ　遺跡の立地と周辺の遺跡

1　遺跡の立地と遍歴

井口車塚古墳は、岡山県津山市河辺字上ノ山５０６－２番地に所在する。本古墳は津山市の東部、吉井川の支流加茂川左岸の丘陵の頂部から、やや下った尾根上鞍部に立地する。北西方向の視界が開けておりかつては眼下に加茂川を見下ろすことができたと推測される。本古墳は帆立貝の形をし、周溝とそれを取り巻く外堤が良好に残存する古墳として古くから周知されていた。また、墳丘の中心部分は、明治末年と昭和初期にかなり大きな破壊にあいその排土がかなり外に掻き出されている。そのため、墳形はかなり変形している。また昭和35年には周辺一帯の開発工事計画が浮上してきたためとりあえず保存措置を講じ、その際簡単な調査を行っている（註１）。さらに、昭和39年５月には北側に隣接する直径10m程の円墳２基（２・３号墳）が完全に破壊され、かろうじて１号墳（井口車塚古墳）の墳丘破壊はまぬがれたものの、東側の外堤の一部は削平を受け消滅してしまった。そのため、１号墳については津山市が土地を買い上げ、昭和39年７月に市指定の史跡となった。本古墳の標高は139m、周辺平野部との比高差は約39mを測る。

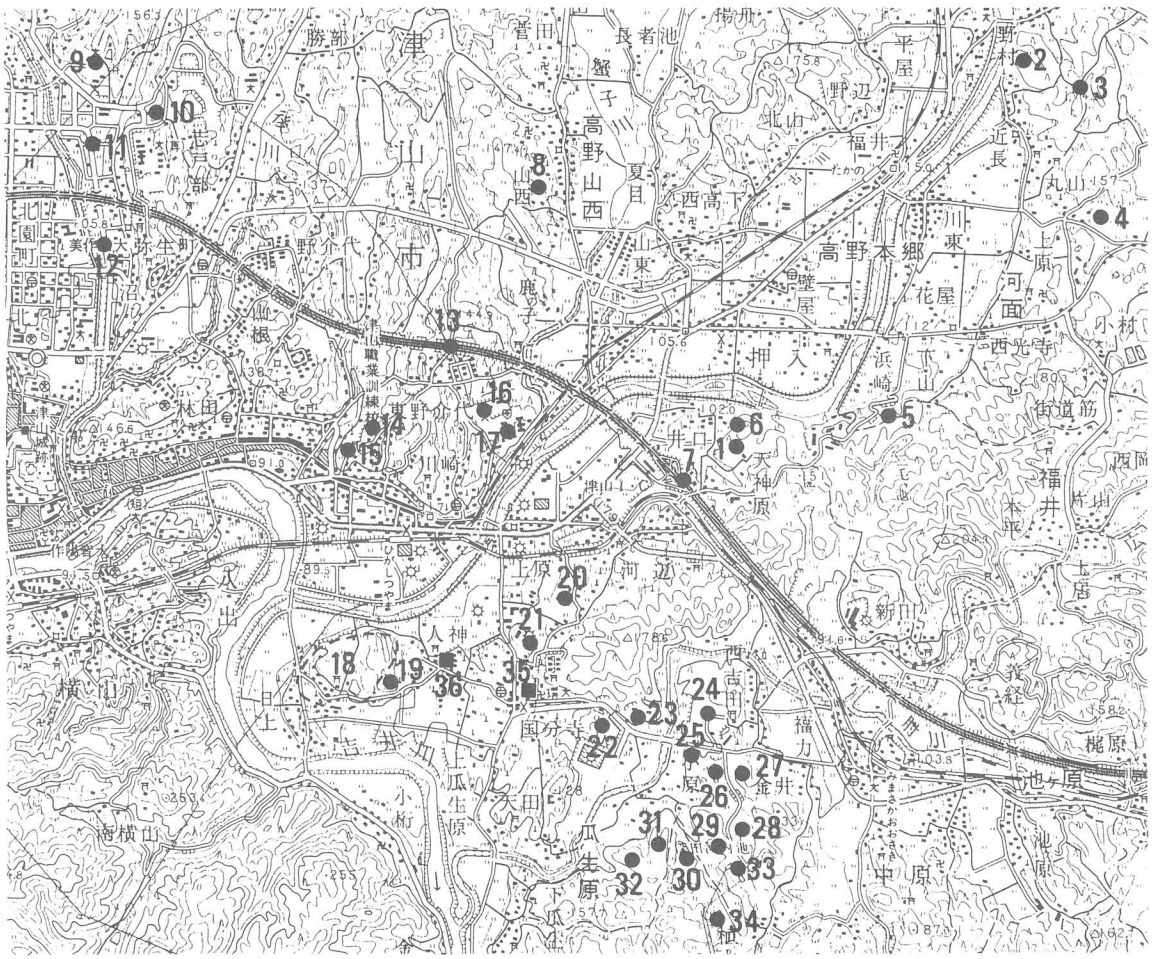
今回の調査は、井口車塚古墳の正確な規模や構造と、さらにかつて破壊を受けた部分の精査で埋葬施設残存を確認し基礎資料を得るとともに、破壊部分の排土を元に戻してできるだけ原形に近い墳丘に復旧させることが目的である。

2　周辺の遺跡

弥生時代の集落跡としては、中国縦貫自動車道建設や中核工業団地造成に伴う調査などでかなりの遺跡が調査されている。中期の押入西遺跡（註２）、西吉田遺跡（註３）、深田河内遺跡（註４）、別所谷遺跡（註５）、一貫西遺跡（註６）、崩レ塚遺跡（註７）、後期は天神原遺跡（註８）、一貫東遺跡（註９）、大畑遺跡（註10）、小原遺跡（註11）、小原Ｂ遺跡（註12）などがある。また、墳墓としては、中期中頃～後期前半の三毛ケ池１号墓（註13）、後期後半の才ノ峪遺跡（註14）などがある。井口車塚古墳（１号墳）には隣接して、かつて円墳２基（２・３号墳）が存在していた。いずれも木棺直葬で２号墳からは円筒埴輪、形象埴輪（家）、須恵器、鉄鏃が、３号墳からは円筒埴輪が出土している（註15）。さらに同一丘陵の先端部に前方後円墳１基と円墳１基のセウ田古墳群（註16）がある。また加茂川左岸には全長55mの前方後円墳の日上天王山古墳（註17）、円墳約60基の日上畝山古墳群（註18）、直径35mの円墳飯塚古墳（註19）、円墳３基の河辺上原古墳群（註20）、円墳12基の天神原古墳群（註８）などかなり集中している。また、横穴式石室墳としては、クズレ塚古墳（註21）、能満寺古墳群（註22）などが

あり陶棺が埋葬されている。さらにこの時期以降の製鉄関連遺跡も多く、狐塚遺跡（註23）、金井別所遺跡（註24）、大畑遺跡（註10）、小原遺跡（註11）などで鍛冶炉や炭を焼いたと考えられる横口をもつ窯跡が検出されている。なおこの加茂川と吉井川とが合流する地域は、古代になると美作国の国分寺（註25）・国分尼寺（註26）が置かれ水陸の交通の要所として重要な位置をしめることとなる。

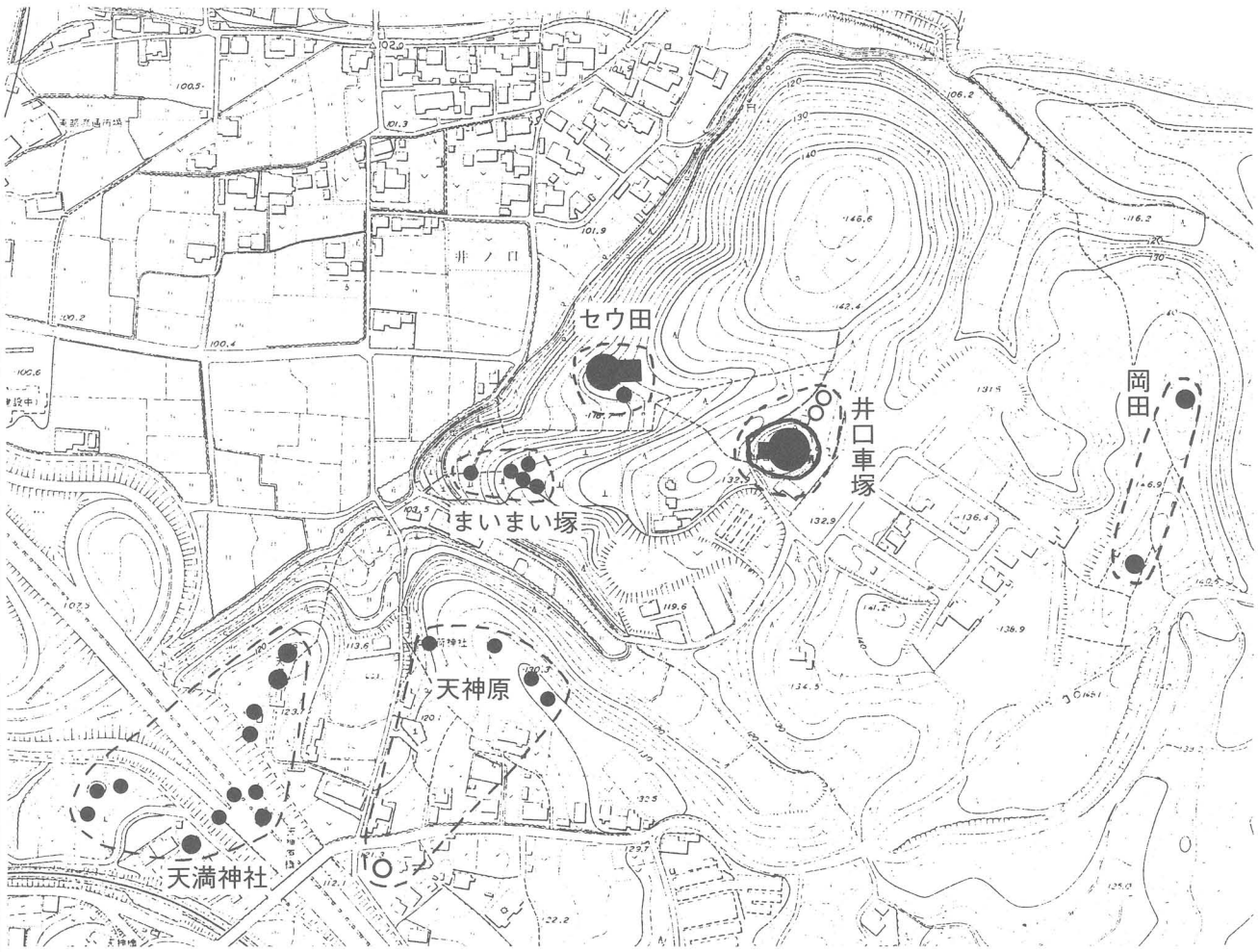
（註１）『津山市文化財調査略報 第１集』津山市教育委員会 1960
（註２）井上弘他「押入西遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告３』岡山県教育委員会 1973
（註３）行田裕美「西吉田遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第17集』津山市教育委員会 1985
（註４）保田義治他「深田河内遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第26集』津山市教育委員会 1988
（註５）行田裕美「別所谷遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第49集』津山市教育委員会 1994
（註６）行田裕美「一貫西遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第33集』津山市教育委員会 1990
（註７）保田義治他「崩レ塚遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第28集』津山市教育委員会 1989



1．井口車塚古墳
2．近長四ツ塚古墳群
3．才ノ峪遺跡
4．近長丸山古墳群
5．三毛ケ池遺跡
6．セウ田古墳群
7．天神原遺跡
8．正仙塚古墳
9．大田十二社遺跡
10．沼遺跡
11．京免遺跡
12．竹ノ下遺跡
13．押入西遺跡
14．六ツ塚古墳群
15．玉琳大塚古墳
16．狐塚遺跡
17．能満寺古墳群
18．日上畝山古墳群
19．日上天王山古墳
20．河辺上原遺跡
21．飯塚古墳
22．長畝山古墳群
23．長畝山北古墳群
24．西吉田遺跡
25．茶山古墳群
26．一貫西遺跡
27．一貫東遺跡
28．深田河内遺跡
29．別所谷遺跡
30．柳谷古墳
31．大畑遺跡
32．小原遺跡
33．金井別所遺跡
34．クズレ塚古墳
35．美作国分寺跡
36．美作国分尼寺跡

第１図　周辺主要遺跡分布図　（Ｓ＝1：50,000）

(註８) 河本清他「天神原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告７』岡山県教育委員会 1975
(註９) 湊哲夫「一貫東遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第43集』津山市教育委員会 1992
(註10) 行田裕美他「大畑遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第47集』津山市教育委員会 1993
(註11) 木村祐子他「小原遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第38集』津山市教育委員会 1991
(註12) 中山俊紀他「小原Ｂ･稲荷遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第35集』津山市教育委員会 1990
(註13) 小郷利幸「三毛ケ池遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第48集』津山市教育委員会 1993
(註14) 中山俊紀他「オノ峪遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第18』津山市教育委員会 1985
(註15)『津山市文化財調査略報No．６』津山市教育委員会
(註16) 小郷利幸「津山市セウ田古墳群墳丘測量調査報告」『年報 津山弥生の里第１号』津山弥生の里文化財センター 1994
(註17)『図録 津山の史跡』津山市教育委員会 1978
(註18)「六ツ塚古墳群･日上畝山古墳群」『津山市文化財調査略報４』津山市教育委員会
(註19)『津山の文化財』津山市教育委員会 1983
(註20) 津山市教育委員会が平成５年度に発掘調査を実施。
(註21) 小郷利幸他「崩レ塚古墳群･クズレ塚古墳」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第31集』津山市教育委員会 1990
(註22)『津山市史第１巻原始･古代』津山市史編さん委員会 1972
(註23) 河本清「狐塚遺跡発掘調査報告」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第２集』津山市教育委員会 1974
(註24) 河本清他「金井別所遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第25集』中国電力株式会社新津山変電所文化財発掘調査委員会･津山市教育委員会 1988
(註25) 湊哲夫他『美作国分寺跡発掘調査報告』津山市教育委員会 1980
(註26) 湊哲夫「美作国分尼寺跡発掘調査報告」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第12集』津山市教育委員会 1983



第２図　井口車塚古墳周辺古墳群分布図　（Ｓ＝1：5,000）

Ⅱ　調査の経過

1　調査経過

調査は、まず立木の伐採と下草刈りを平成４年５月27日から６月１日まで行い、６月８日から９日まで調査前の墳丘測量図を作成した。６月12日から各トレンチの調査を開始し、葺石の存在、墳丘が２段築成でありテラス部分に円筒埴輪が巡り、西トレンチの造出し部分では形象埴輪が出土することなどを確認し、６月25日に各トレンチ調査をほぼ終了した。その後９月21日から11月11日まで中央部分（破壊部分）の精査を行い、破壊行為がかなり大規模に行われているため埋葬施設はほとんど残存しない事を確認した。10月７日に津山市文化財保護委員の視察、10月29日にラジコンヘリコプターで全景の航空写真を撮り、10月31日には一般を対象とした現地説明会（約50名参加）を開催した。平成５年３月３日から４日まで破壊部分の埋め戻し作業を行い、墳丘をできるだけ元形に復旧させた。

2　調査体制

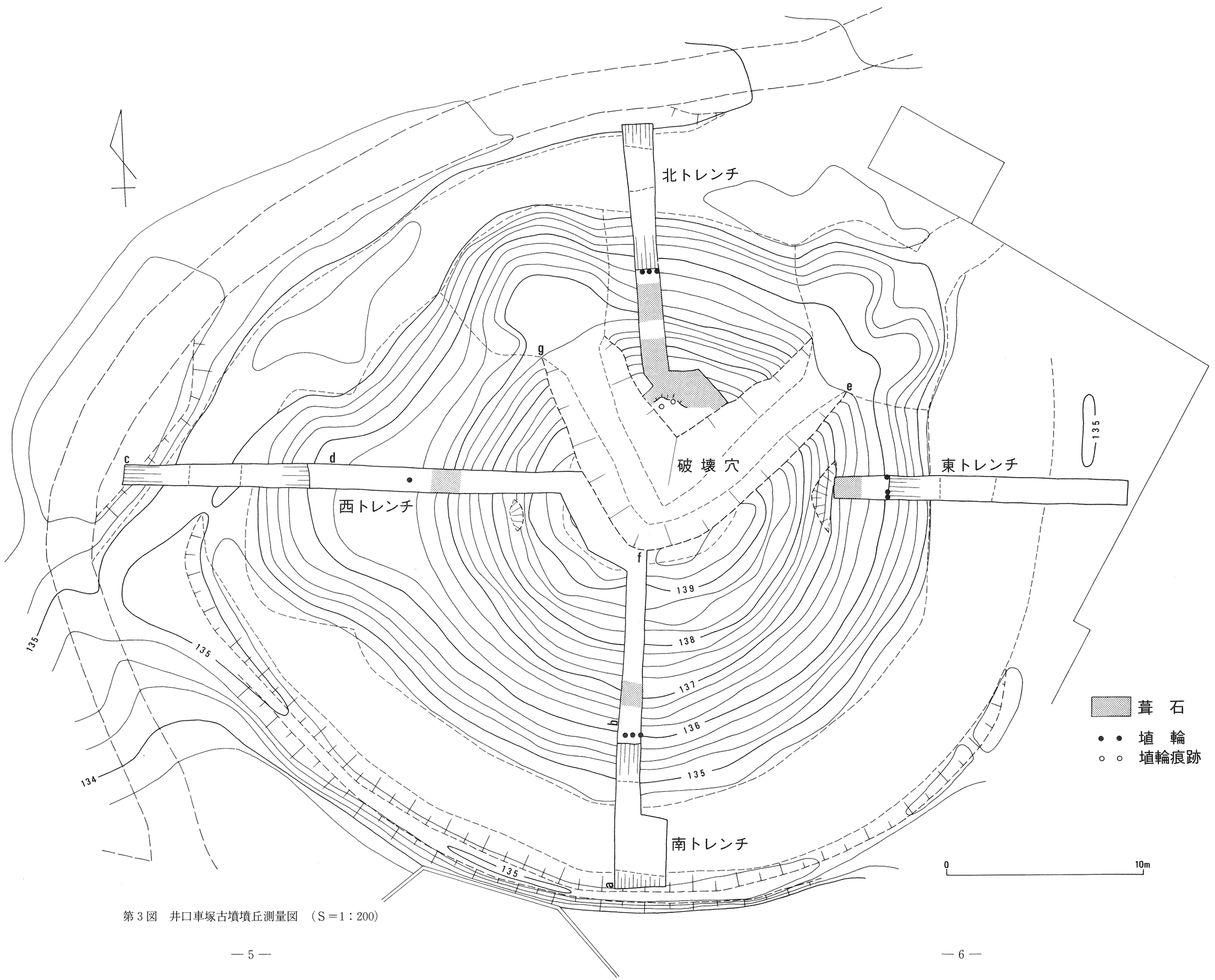
発掘調査は津山市教育委員会が主体となり実施した。調査体制は次の通りである。

発掘調査主体　津山市教育委員会　教育長　森定貞雄（～Ｈ４．９．30）
藤原修己（Ｈ４．10．１～）
教育次長　長瀬康春（～Ｈ５．３．31）
内田康雄（Ｈ５．４．１～）
文化課長　森元弘之（～Ｈ５．３．31）
籾山三千穂（Ｈ５．４．１～）
文化財センター所長　須江尚志
次長　中山俊紀
主事　小郷利幸（調査担当）

発掘調査作業員　赤堀富江、神尾隆治、国定霜子、国定敏男、末澤賢次、末澤靖子、中塚欣子、中塚信晴、広岡亀夫、広岡勝代、森二三夫、山下加海、山下美津代

尚、発掘調査から報告書作成に至るまで下記の方々から有益なご指導・助言・協力を得た。記して厚く御礼申し上げます。（敬称略）

青柳泰介、草原孝典、桑田俊明、小谷善守、島崎東、長谷川一英、仁木正視、仁木康治、弘田和司



第３図　井口車塚古墳墳丘測量図　（Ｓ＝1：200）

Ⅲ　調査の記録

1　各トレンチの概要

墳丘規模などの確認のため四方（東西南北）にトレンチを入れ（第３図参照）中央の破壊穴部分については壁面の精査をおこなった。以下、各トレンチごとの概要と出土遺物について説明を述べる。

北トレンチ（第４図）

頂部から外堤に向け幅1.2m、長さ16mのトレンチを入れた。その結果墳丘は２段築成と判明し、上段ほぼ全面には河原石や山石などで葺石を施していた。墳頂部についてはトレンチを東側に一部拡張した。葺石は墳頂部付近については角ばった山石を多用し、その他については丸みのある河原石を使用している。ただ葺石の残存状況は下方では比較的悪く、一部ではほとんど転落してしまっている箇所もある。頂部平坦面には、埴輪の集中部分が２カ所見られ、いずれも現位置を保っていないものの、この頂部には埴輪が立て並べられていた事が推測される。上段斜面の葺石間からも埴輪片が出土している。また、上段と下段の境には幅0.7m程のテラスが形成され、このテラスの外側にはほぼ等間隔に円筒埴輪を立て並べている。この埴輪は基底部分のみ残存しほぼ20cm間隔に３ケ所確認した。下段には葺石は見られず、周溝は幅２mを測り外堤に向かって緩やかに上っている。この外堤については林道があるため全掘はできていないが、盛土によって作られている。この外堤側の斜面でも埴輪片（第９図７）が出土している。そのため、外堤の部分にも埴輪が巡っていた可能性がある。周溝内からは、転落したかなり大きめの円筒埴輪片（第９図１）が出土している。周溝の埋土は灰色の粘土質である。周溝部分には排水用の土管が埋設されている。

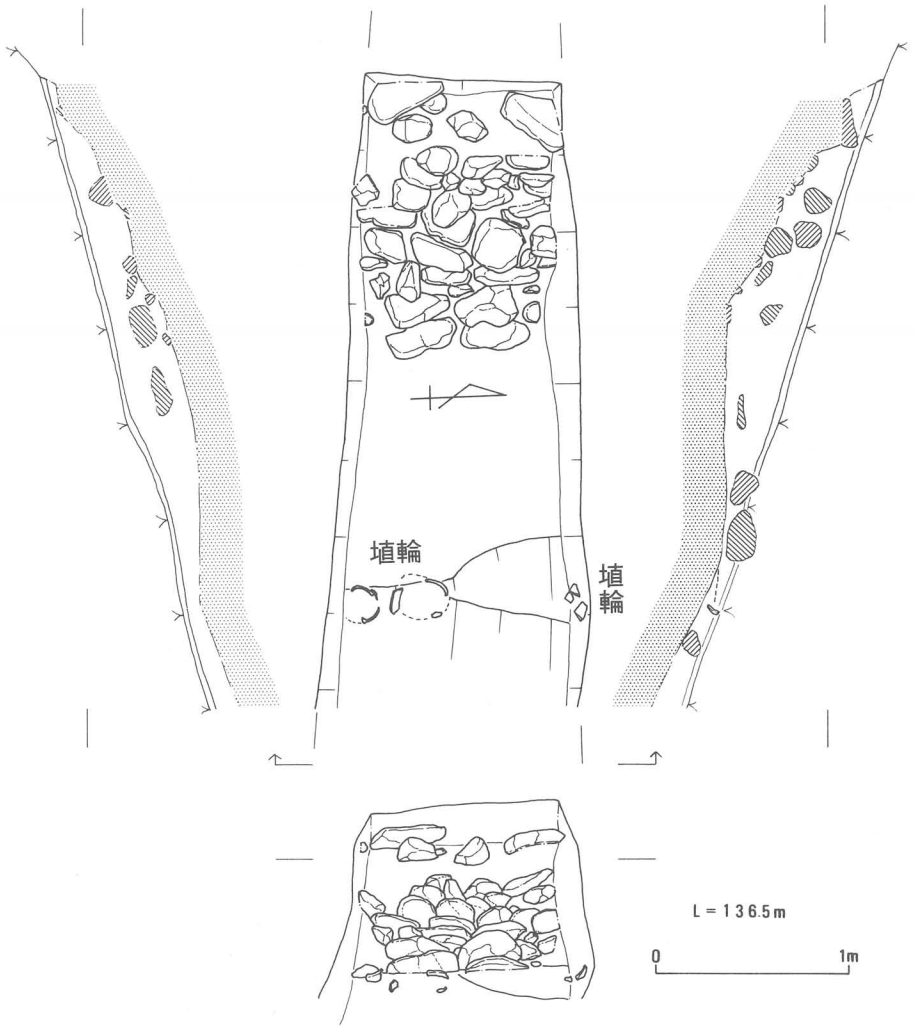
東トレンチ（第５図）

破壊穴があるため上段の一部から外堤まで幅1.2m、長さ15mのトレンチを入れた。外堤部分についてはすでに削平を受けているためほとんど残存していない。北トレンチ同様上段には葺石が存在する。葺石は、基底部にやや大きめの石を使用し、その上に横方向の列を揃えるように規則的に積んでいるようであるが、全掘していないため全容は不明である。また、幅1.2mのテラス外側には円筒埴輪の基底部がほぼ等間隔に３ケ所存在するが、北端についてはテラス部分が崩落しているため正確な位置はつかめていない。周溝部分は幅３mを測り埋土から転落した円筒埴輪片などが出土した。周溝の埋土は灰色の粘土質である。

南トレンチ（第６図）

頂部から外堤部分まで幅1.2m、長さ18.5mのトレンチで周溝部分については一部東側に拡張した。各施設に関しては北トレンチと同様であるが、上段の葺石は基底部から幅1.3m程し

第4図　北トレンチ平・断面図　（S＝1：40）

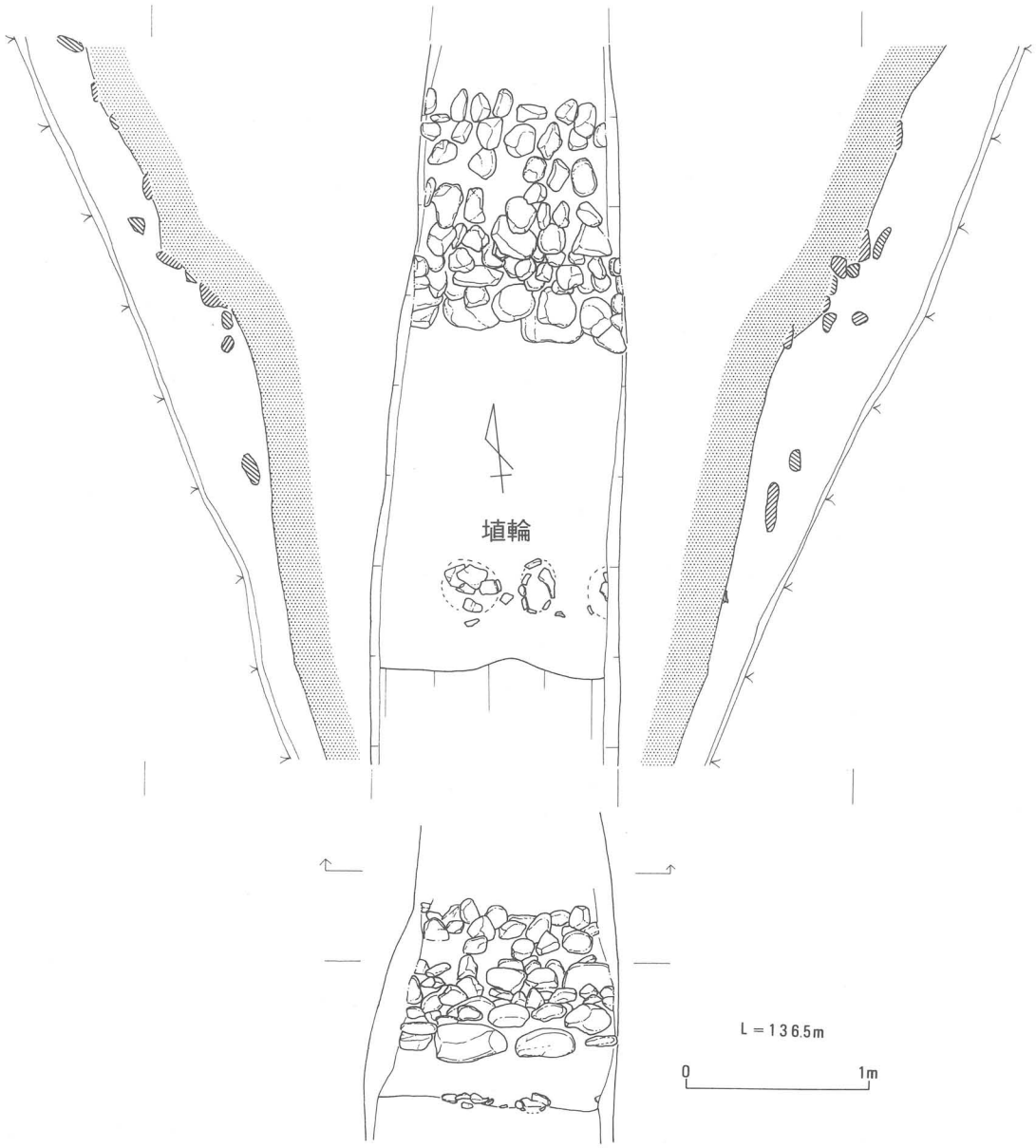


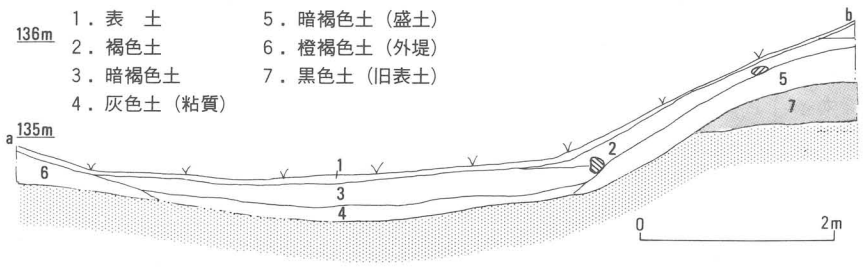
第５図　東トレンチ平・断面図　（Ｓ＝1：40）

か存在しない。周溝内からかなりの転落石が検出されたが、量的には少なく上段の全面に葺かれていた可能性は少ない。葺石はすべて河原石で横方向の列を揃えて９～10段に積んでいる。幅２ｍのテラス外側には、円筒埴輪の基底部が３ケ所存在するが、一番西端に関しては間隔的に存在してもよさそうであるが、この部分には抜き取り痕も無く当初から無かったと推測される。第６図に周溝部分の土層図がある。７は旧表土で５が盛土である。３・４が周溝の埋土でこの中から埴輪片などがかなり出土している。６は地山の土で積まれた外堤である。周溝埋土が粘土質であることからこの周溝にはかなり長期にわたって水がたまっていたものと推測される。

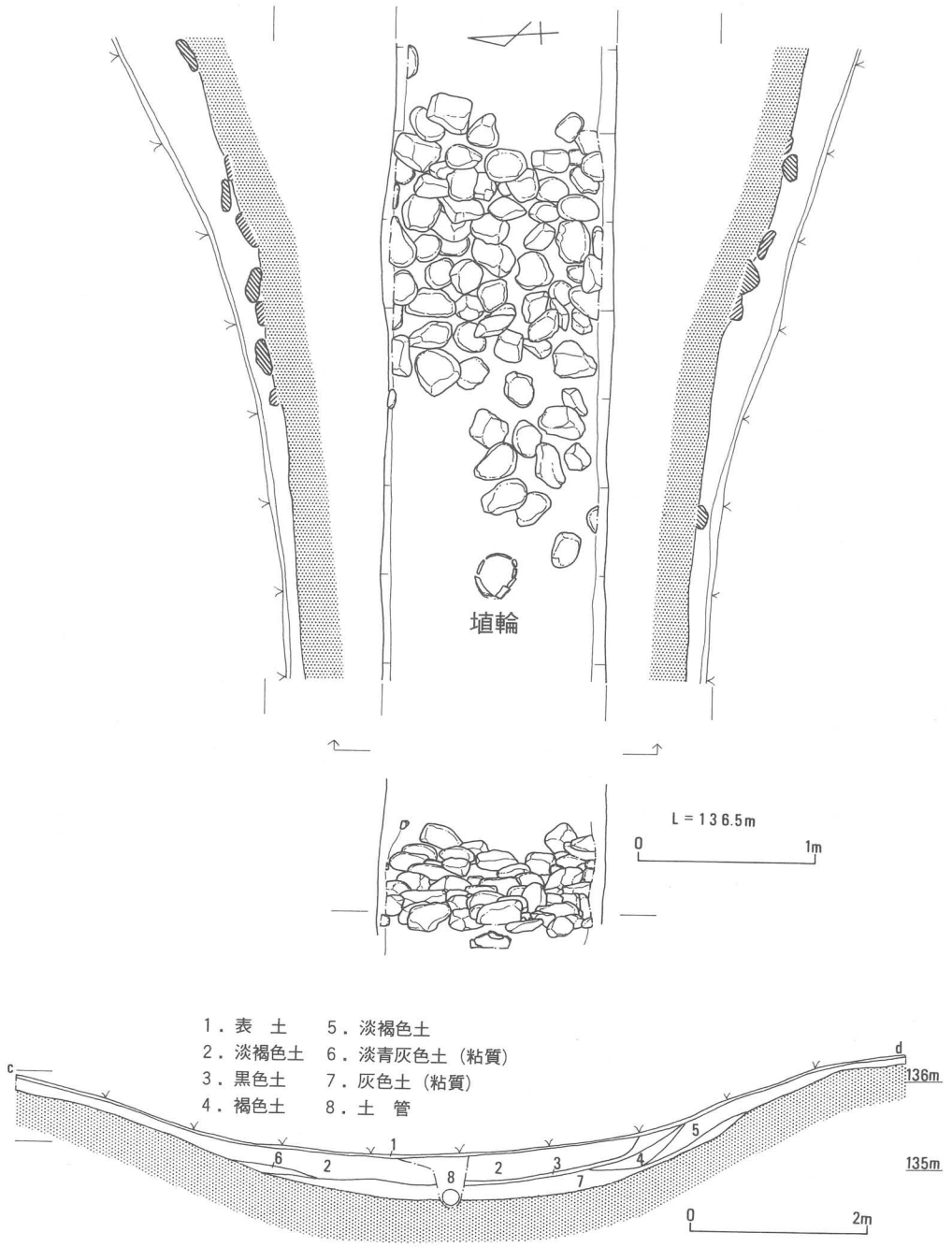
西トレンチ（第７図）

頂部から造出し、外堤へと幅1.2m、長さ24mのトレンチを入れた。北・東・南トレンチのテラス部分がこの造出しの平坦面とほぼ同一レベルである。上段の葺石は、検出時にはほぼ斜





第6図　南トレンチ平・断面図（S＝1：40）及び土層図（S＝1：80）

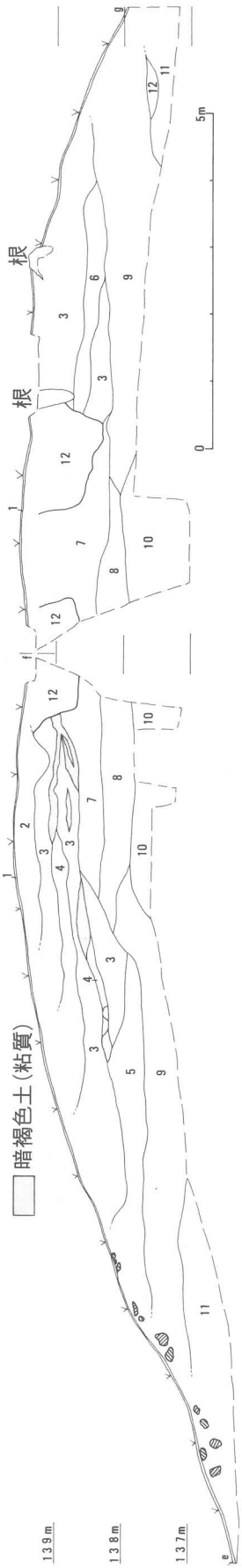


第７図　西トレンチ平・断面図（Ｓ＝1：40）及び土層図（Ｓ＝1：80）

面全面で浮いた状態で出土したが、その内現位置を保っていたのは幅1.6m程である。そのため本来は全面に葺かれていた可能性が大きい。円筒埴輪は葺石基部から１m程離れた所から１カ所検出した。ほぼトレンチ中央にあるが、他のトレンチの様に等間隔にかなり密に立て並べてはいないようである。またこれ以外の所で円筒埴輪は確認していない。造出しの平坦面は長さ６m、地山の削り出しによって整形されている（第７図土層図参照）。この部分で埋葬施設

なども検出されていない。周溝は幅 2.6mで外堤部分については林道があるため全掘していないが、地山の削り出しの上に、若干の盛土によって造られているものと推測される。この周溝内から、円筒埴輪の他、家・盾・人物などの形象埴輪片がかなり出土している。形象埴輪が出土したのはこのトレンチだけである。周溝部分には排水用の土管が埋設されており、さらにトレンチの南側は排水のために外堤が切られている。

中央の破壊は２時期にわたって行われているため、その部分がＬ字形に大きくえぐられ、廃土がかなり外へ掻き出されている。この破壊部分をできるだけ全掘し壁面の精査を行った。破壊穴は最大幅6.5m、深さ2.5m以上、総延長22m以上にも達する大規模なものである。このＬ字形の破壊穴は北東側が先でその後北西側からである。この破壊穴の南側壁面の土層図が第８図である。この図は斜めの壁面図のためやや正確さを欠くものの墳丘構築の概略は知ることができる。北東・北西壁では盛土の様相が異なっている。８～11まではほぼ水平に積まれた互層の盛土で、それから上については北東部分には地山ブロック（暗褐色粘質土）がかなり含まれているが、北西部分には見られない。この事から地形的な制約（北東部分の地山がかなり低かった）も含め墳丘構築にあたり場所によってかなりの工夫がなされているものと推測される。２カ所ある12は盛土内から掘り込まれた遺構であり埋葬施設の一部の可能性が考えられる。ただ対岸の北壁にはこの12に対応するものは見られない事からこれが埋葬施設とすると、そのほとんどが破壊穴によって破壊されているものと考えられる。なお、排土の精査もおこなったが、鉄剣と鑿の小片が出土しただけである。



第８図　井口車塚古墳墳丘断面図　（S＝1：100）

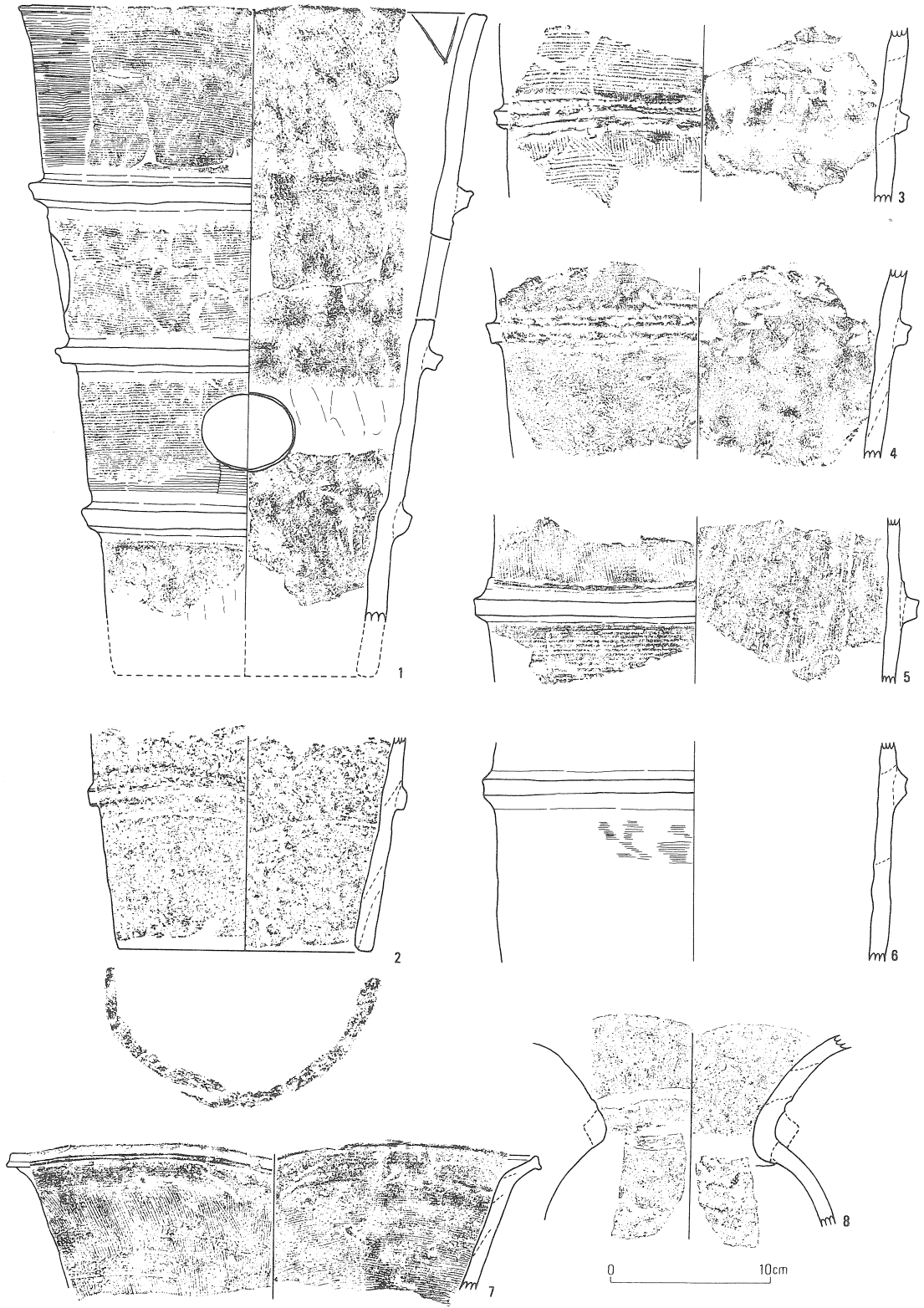
2　出土遺物（第９～15図）

出土遺物としては、円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪、鉄剣、鉄鑿、須恵器などがある。

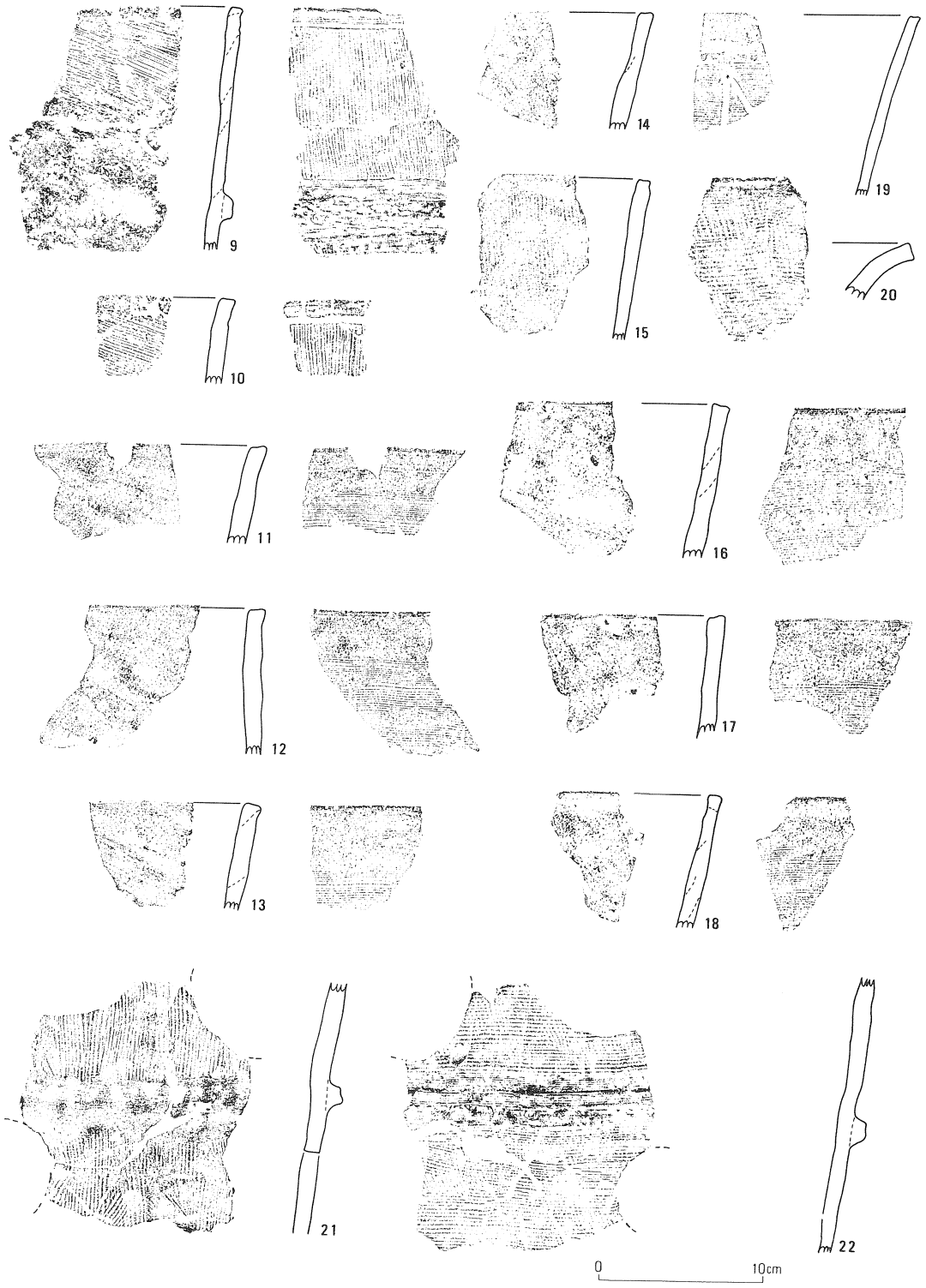
円筒埴輪は各トレンチからコンテナ約７箱分出土している。

その中でほぼ完形に復元できるのは１のみである。口径27cm、残存高38cmを測る。口縁部はやや外反し端部上面は平らに仕上げている。タガは３条で断面は上２段が台形の中央のへこんだM状で、最下段がやや偏平な台形状である。２・３段目に円孔が一対ずつ存在する。基部以外の外面には２次調整のヨコハケが全面に施され、基部外面はヘラ状工具の縦方向のナデにより面とりをおこなっている。内面についてはすべて縦方向のナデ仕上げで、特にタガの部分では指頭痕が明瞭に残る。ヨコハケは、工具を止めた際の縦の条痕が観察される部分もあるが、静止させる事なくカキ目状に一気に巡らしているようである。ハケの単位は明瞭ではないが幅2.2cm（ハケ単位16本）と幅５cm以上（24本以上）の両者が観察でき、ほぼ全面に隙間なく施されている。焼成は、須恵質との中間的なものである。口縁部内面に「Ｖ」のヘラ記号がある。２の底部には粘土紐の接合痕が明瞭に残存する。また、外面に２次調整のヨコハケを省略したものは９・10・23・27・30などがあり、その中で９・10は口縁端部のタテハケ上に２条の沈線を施している。９・10は同一個体の可能性がある。５はヨコハケとタテハケのみの両者が見られる。口縁部にヨコナデを施しヨコハケを消しているものは11～13、16～18があり、すべて須恵質である。内面に明瞭なヘラ条工具の圧痕が観察できるもの（４）があり、この場合は特にタガを取り付ける際のナデ痕と考えられる。また、内面にハケを施したものの中には、タテハケのもの（５・21・24・27・28）、ナナメハケのもの（９・26・30）などがある。基部については内外面ともほとんどナデ仕上げであるが、外面にタテハケがみられるもの（38・41）、外面にヨコハケ、内面にタテハケがみられるもの（40）もある。タガは、台形の中央のへこんだM形を呈するものがほとんどで最下段のみ突出の小さい偏平なものである。14の外面に逆Ｖ字に似たヘラ記号がある。朝顔形埴輪の破片も数点出土している。７・８・20・32・35～37がそれで、全容は不明だが32・35以外は須恵質のものである。７の外面にはタテハケ、内面にはヨコハケを施し、口縁部はやや「く」の字に外反し端部を上下につまみ出し、ヨコナデを施している。８は上部外面にタテハケ、内面にヨコハケを施しくびれ部分のタガは剝落し、タガの上に１条の沈線が巡っている。32・35の外面にはヨコハケが、36の外面にやや乱雑なナナメハケ、内面にヨコハケが施されている。

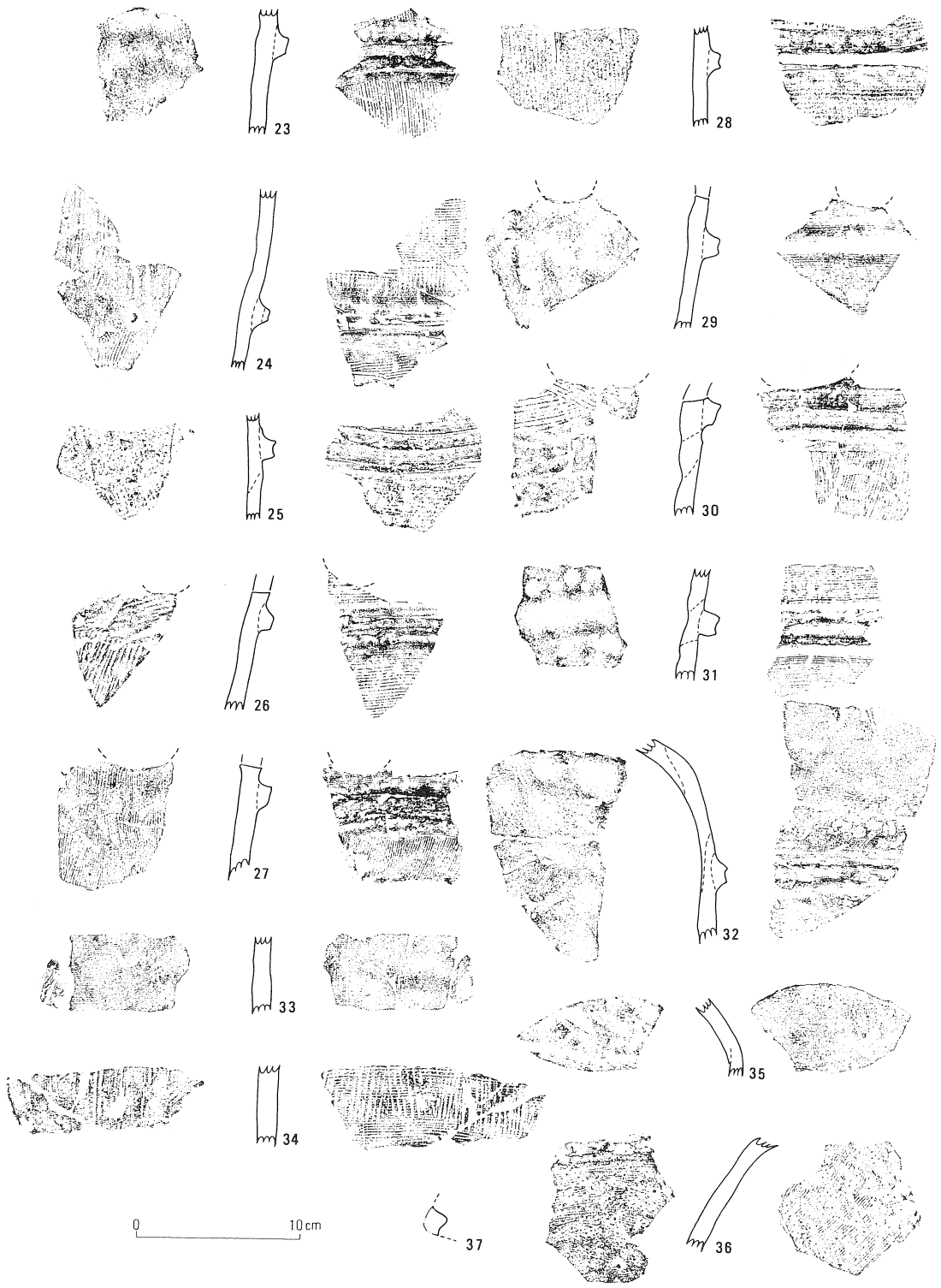
形象埴輪としては、盾（47～49）・家（50～61）・人物（62～67）などがある。いずれも西トレンチからの出土である。盾の内47は、鋸歯文、交差する綾杉文、菱形格子文で構成されるが破片であるため全容は不明である。48は４条の沈線の内側に綾杉文を施す。49は、４条の沈線のみ観察できる。盾でない可能性もある。50は家の破風部分と考えられ、外面中央と右下に２重円の内側に菱形文を描く模様がある。内面には、綾杉文らしきものが観察できる。51・52は鰹木、53・54・58については屋根の部分、55・56については屋根の妻部分の可能性があるが明確ではない。57・59・60・61については壁の部分と考えられる。57の外面には細かいハケが、59には綾杉文が、60・61には直行する沈線と円孔が見られる。62は楕円形の筒状のもので、剝



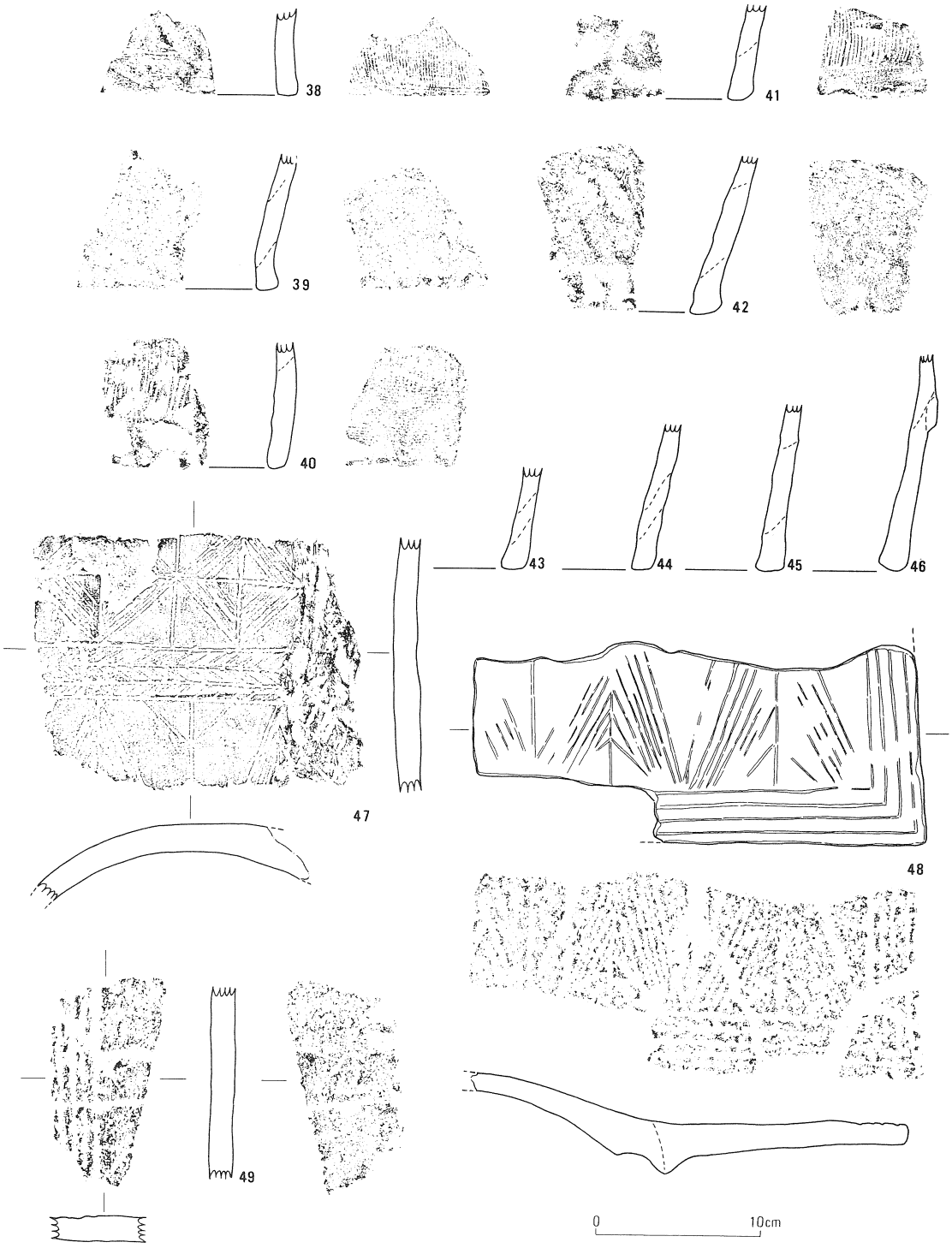
第9図　出土遺物（1）　（S＝1：4）



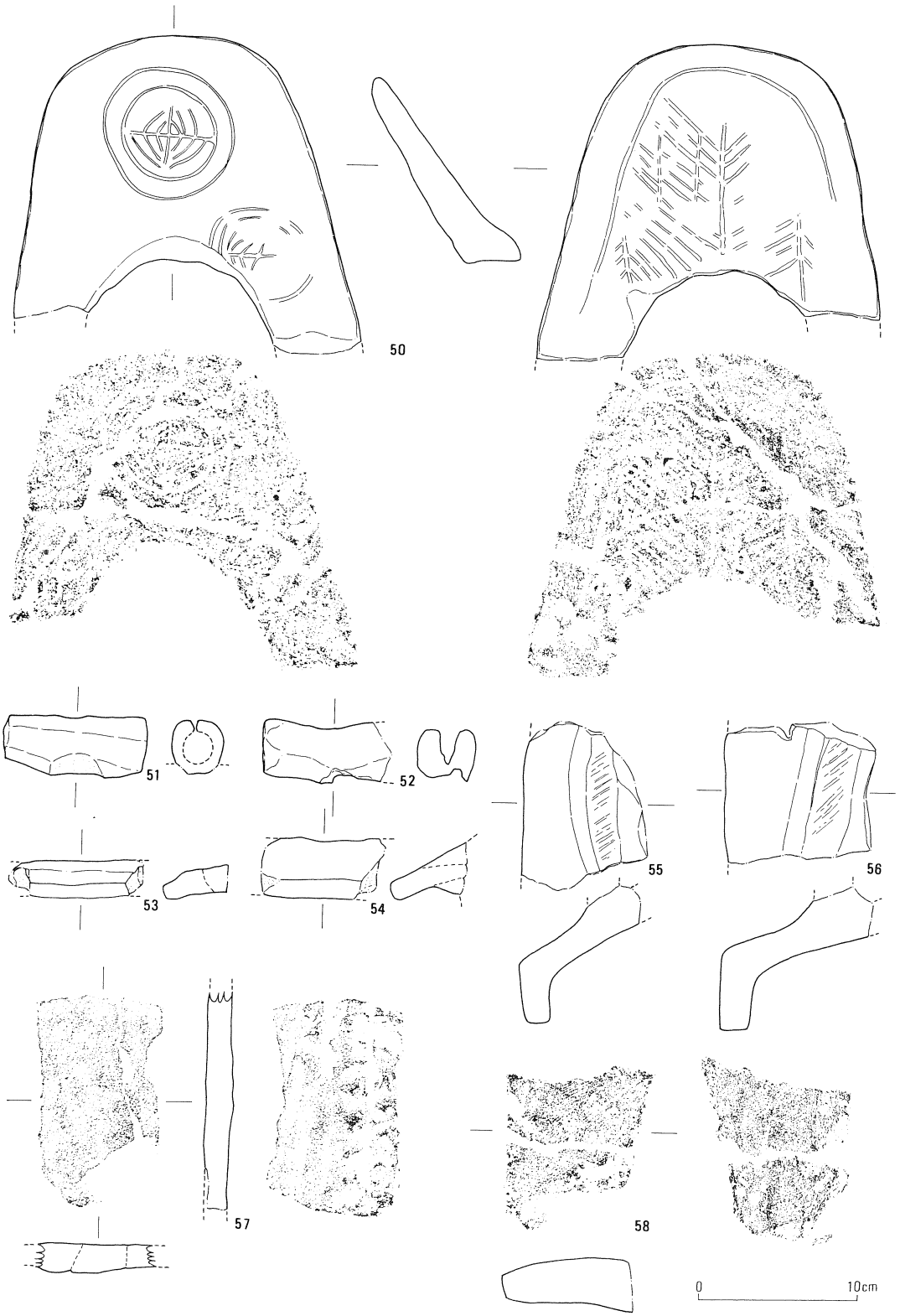
第10図　出土遺物（２）　（S＝1：4）



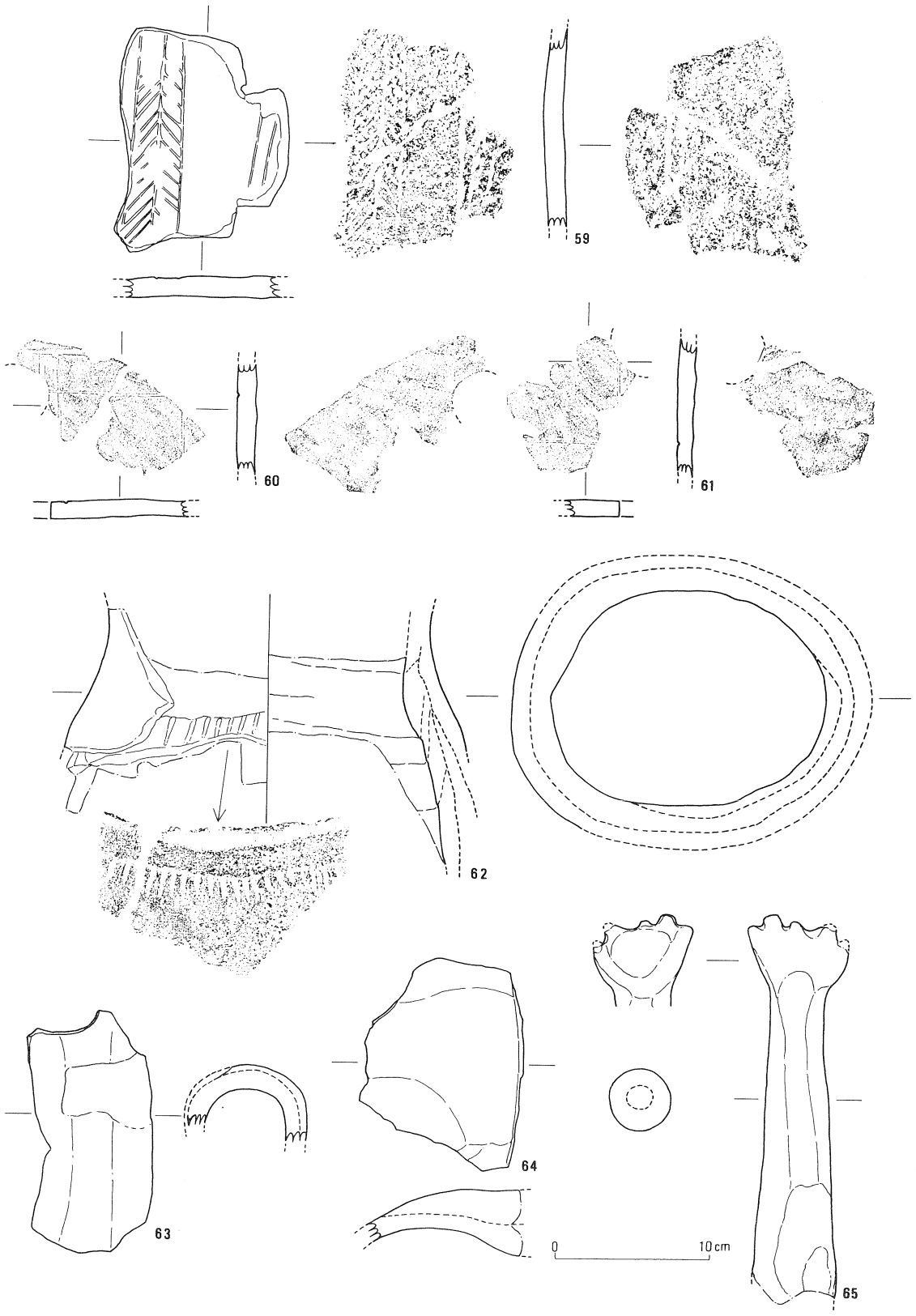
第11図　出土遺物（3）　（S＝1：4）



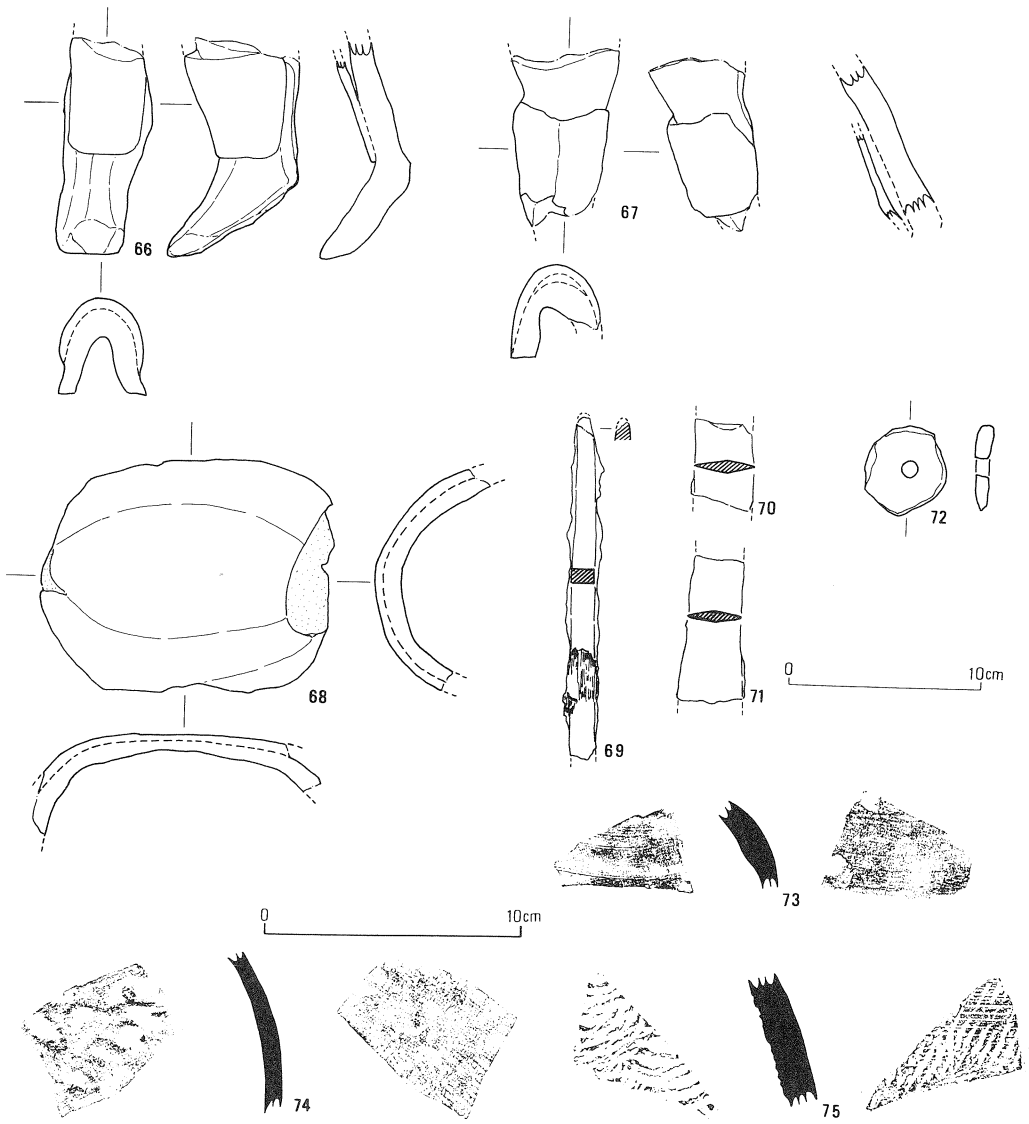
第12図　出土遺物（４）　（S＝1：4）



第13図　出土遺物（5）（S＝1：4）



第14図　出土遺物（6）（S＝1：4）



第15図　出土遺物（７）（66～72…Ｓ＝1：4、73～75…Ｓ＝1：3）

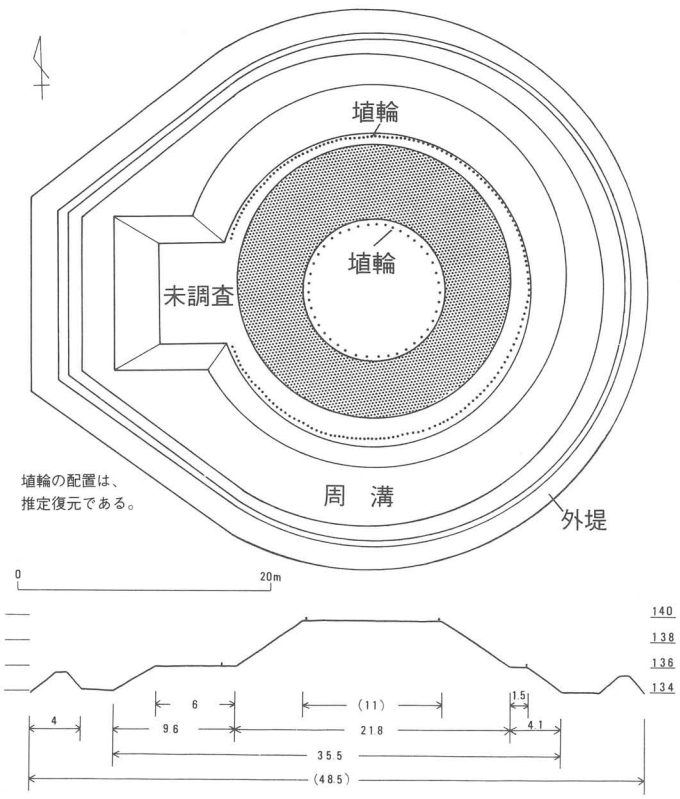
落痕が明瞭であり接合面には縦状の線刻が周囲に巡っており、2～3重に粘土を接合している。おそらく人物の胴部あたりと考えられる。65は手の部分で筒状を呈し5本の指が明瞭に表現されている。66・67は足の部分と考えられすね当ての部分が表現されているが、全体を表現するのではなく何かに張り付けた張りぼて状のものである。63・64・68についても人物の一部分と考えられるがどの部分かは不明である。69～71は破壊穴の埋土から出土した唯一の副葬品である。69の鉄鑿は全長18cm、先端部は欠損し基部には木質が残る。70・71は鉄剣片、72は紡錘車状の土製品で中央に穴があいている。73～75は須恵器の破片で小片のためいずれも器形は明確ではない。74には外面にタタキの痕跡がかすかに観察でき、75は外面に平行タタキ痕、内面に同心円文が明瞭に存在する。

Ⅳ　まとめ

井口車塚古墳の規模の詳細は第16図の通りである。墳丘は２段築成で上段と下段との境には幅１～２ｍのテラスが形成され、これと同一レベルの所に造出しが付設している。造出し部分については、全面発掘していないため詳細な規模・構造などは不明である。上段の斜面には葺石が存在するが、北トレンチを除く他のトレンチでは全面に葺かれていたかは疑問があり、基部から高さ1.6ｍ程残存する。そのため、平野部から眺望できる部分（北側）のみ全面に葺石が施され、その他の部分については省略されていた可能性も考えられる。埴輪は墳頂とテラス部分に巡っており、前者に関しては破壊部分が大きくほとんど基部が残っていない。そのため配置については明確ではない。また、後者は造出し部分については明確でないが、それ以外の所にはほぼ0.2ｍ間隔に隙間なく立てられていたものと推測される。ただ、出土した埴輪の中に量的には少ないが朝顔形の円筒埴輪が含まれているため、両者が共存していた事は確かである。ただどのような組み合わせで並べられていたかは明瞭でない。また、周溝の形態については南側に残る外堤から推測して、ほぼ馬締形になるものと考えられる。外堤は幅４ｍ程で大部分が盛土によって形成されているものと推測される。

また、後世の破壊のため埋葬施設のほとんどが破壊されていた。壁面に痕跡らしきものが２カ所確認されたが、構造を確認するまでには至っていない。この部分の廃土内に石材が見られない事から、竪穴式石槨の類いではなさそうである。副葬品としては、鉄剣・鑿の小片が唯一廃土内より出土しただけである。

埴輪の中で形象埴輪の家、人物、盾などが出土している。その中の家は全容は不明だが、破風部分（第13図50）が出土し、両面に線刻で模様を施している。破風以外の屋根部分での線刻による模様はみられるが（註１）、



第16図　井口車塚古墳墳丘復元図　（Ｓ＝1：600）

破風に見られるものは少ない。特に本墳の場合は、表側に2重の円の内側に菱形文、裏側には綾杉文といった特異的な模様を施している。破風に模様を施す例としては柵原町月の輪古墳で外側周囲に2重の円の模様（註2）、鳥取県長瀬高浜遺跡では菱形文（註3）、大阪府はさみ山古墳では直弧文（註4）、奈良県新沢千塚218号墳では2重の円弧文（註5）などがあるものの、本墳と同様なものは見られない。さらに盾の模様（第12図47）は、岡山市造山古墳に類似した模様構成が見られる（註6）。盾形埴輪については、内外区の形態や模様で分類・編年が行われており（註7）、それによればこのような模様構成のものは、ほぼ5世紀前半代に盛行しその後は衰退するものである。

次に時期であるが時期決定の可能な遺物が少ないため、円筒埴輪などから推測してみたい。円筒埴輪の中には明らかに須恵質のものが含まれている。外面の調整はタテハケの上に連続したヨコハケ（C種ヨコハケ、註8）を施すものと2次調整のヨコハケを省略したタテハケだけのものの2者がある。特に基部以外に口縁部においてもすでにヨコハケが省略されているものがある事から、やや新しい様相も見うけられる。

次に美作における埴輪の類例と比較してみたい。津山市才ノ峪1号墳（註9）では連続したヨコハケ（C種ヨコハケ）を施し、本墳と比べるとタガの突出はやや小さい。朝顔形埴輪を伴うが形象埴輪はなく、須恵質のものも若干量見られるが比率から言えば非常に少ない。共伴する須恵器はTK23～47（註10）の時期である。津山市長畝山北4号墳（註11）でも個体数は少ないがヨコハケが見られ、共伴する須恵器はTK23～47である。また、津山市日上畝山50・51・52・54号墳の内、本墳に非常に類似したヨコハケをもつのは54号墳だけであるが、タテハケだけのものも出土している。共伴する須恵器については不明である。50号にも両者が見られるが、タガなどの特徴やヨコハケの状況がやや異なっている。共伴する須恵器はTK23～47のものとやや新しいMT15～TK10のものとが出土している。51・52号墳はタテハケだけのものであり、51号墳にはTK23～47の須恵器が出土している。ただこの古墳群については未整理のため共伴関係等詳細は明確ではないが、同一古墳で明らかに2次調整のヨコハケをもつものと、タテハケだけのものとが共伴し、出土した須恵器もTK23～47より逆上るものは看取されない（註12）。また、津山市十六夜山古墳でも本墳同様のヨコハケをもつ円筒埴輪や形象埴輪が出土しているが、時期的な面については明確ではない（註13）。

これらヨコハケ（C種ヨコハケ）の特徴は、従来の埴輪編年ではⅣ期（註8）に比定されるが、共伴須恵器との編年観には若干のずれが生じている。この事からこれら古相の特徴が美作地方では残る現象としてとらえ、共伴の須恵器観から次のⅤ期に比定し、この時期を細分する見解がある（註14）。また、次ぎの時期としては、美作町北山1号墳（註15）、津山市河辺上原1号墳（註16）、六ツ塚1号墳（註17）などがあり、いずれもMT15～TK10の須恵器と共伴し、一部で2次調整のヨコハケが残るが、ほとんどすべてが1次調整のタテハケのみである。さら

	古墳名	所在地	規模 (m)			埋葬施設			外部施設				出土遺物	時期	参考文献(註)
			全長	円丘部径	方形部長	円丘部	方形部	その他	円筒埴輪	形象埴輪	葺石	周溝			
1	井口車塚古墳	津山市河辺・上ノ山	35.5	30	7.5				○	○	○	○	剣・鑿	5世紀末	本書
2	中宮1号墳	津山市福田・剣戸	23	18	5	横	竪		○				須恵器・鉄鏃・刀子・斧・鑿・馬具・玉類・土師器	6世紀中頃	18
3	中宮2号墳	津山市福田	20			横？				○			須恵器		18
4	高野山根1号墳	津山市福田	32	26	6	竪			○						18
5	六ツ塚1号墳	津山市川崎・六ツ塚	21	17	4	木2	木	木	○	○	○		須恵器･鎌･斧･刀･剣･馬具･玉類･紡錘車･金環･刀子･鉄鏃･鉄滓･土師器	6世紀前半	17
6	大野木塚古墳	津山市下横野	24.5	17.5	7				○				須恵器	6世紀中頃	12
7	月の輪古墳	柵原町飯岡・倉見		60	9	粘2	粘		○	○	○		鏡・玉類・刀・剣・鉄鏃・銅鏃・甲・石釧・槍・刀子・のみ・鉇	4世紀後半	2
8	木の元1号墳	美作町位田	27	20					○				須恵器		33
9	上相中塚	美作町上相	21	17					○						33
10	上相東塚	美作町上相	24	18					○						33
11	四つ塚13号墳	八束村上長田・中野	23.3	19	4.3	木2			○	○		○	鏡・須恵器・馬具・刀・鉄鏃・刀子・玉類・竪櫛	6世紀前半	20
12	四つ塚14号墳	八束村上長田・中野		25								○			20
13	石道山A10号墳	川上村西茅部・石道山	14	10	4	木？									20
14	平林1号墳	川上村西茅部・平林	22	18	4								刀・鉄鏃・玉類		20
15	伊勢領大塚古墳	鏡野町伊勢領・宗枝	37			石					○		鏡・剣	5世紀後半	34
16	笠松古墳	鏡野町入・笠松	30			粘？							須恵器	5世紀後半	35
17	一本松古墳	岡山市北方・半田山	65	43		竪							甲冑・槍・鉄槌・鉄鉗	5世紀後半	36
18	小盛山古墳	岡山市平山・造山	105		24				○	○	○	○	刀	4世紀後半	35
19	榊山古墳	岡山市新庄下		35	25	木			○				鏡・刀・剣・銅鈴・帯鉤・斧・槍・砥石・須恵器・陶質土器	5世紀前半	37
20	千足古墳	岡山市新庄下・千足	74	55	22	粘･横			○				鏡・玉類・鉄鏃・巴形銅器・甲冑・刀・剣		38
21	随庵古墳	総社市西阿曽	40	30	10	粘･竪							鏡・玉類・刀・剣・刀子・鉾・槍・甲冑・鉄鏃・馬具・鎌・鋸・砥石	5世紀	21
22	久米18号墳	総社市久米	26	21	5				○					5世紀	39
23	夫婦塚古墳	総社市赤浜	45	32	13	竪			○			○	挂甲・刀	5世紀後半	40
24	銭瓶塚古墳	総社市下林	50	35	15				○					5世紀後半	41
25	西山周辺35号墳	総社市福井		15					○						42
26	〃 44号墳	総社市福井		15	5	竪			○	○			須恵器・刀・鉄鏃		42
27	野宮古墳	総社市													43
28	車塚古墳	山手村													35
29	天狗山古墳	真備町川辺・南山		28	18	竪			○		○	○	鏡・刀・剣・刀子・鉄鏃・挂甲・胡禄・馬具・鍬先	5世紀後半	44
30	箭田大塚古墳	真備町箭田矢砂		46	5～6	横			○	○		○	刀・鉄鏃・馬具・金環・玉類	6世紀後半	45
31	仙人塚古墳	笠岡市走出・山口	43	36	7	竪2			○	○	○	○	須恵器	5世紀後半	22
32	西もり山古墳	山陽町穂崎・廻り山	85	61	24				○	○	○	○		5世紀後半	46
33	廻り山古墳	山陽町岩田・廻り山	90						○				須恵器	5世紀後半	46
34	土師茶臼山古墳	長船町土師	50	42	8					○	○			4世紀後半	35
35	牛文茶臼山古墳	長船町牛文	55	38	17	竪			○	○	○		鏡・須恵器・刀・冑・馬具・鉄棒・貝釧	5世紀後半	47
36	お荒神山古墳	長船町													43
37	鶴山丸山古墳	備前市畠田		45～54	3	竪			○	○	○		鏡・剣・刀・斧・鉄鏃・玉類・車輪石・四脚盤・合子・土師器	4世紀後半	48
38	大明神古墳	和気町原	29	20	9				○	○			須恵器	5世紀後半	35
39	立古墳	北房町上水田・立	50												35
40	御崎2号墳	北房町													35
41	小殿御陵古墳	北房町	20												35

竪…竪穴式石槨
木…木棺直葬
粘…粘土槨
横…横穴式石室
石…長持形石棺

第1表　岡山県内帆立貝形古墳（造出し付き円墳含む）一覧表　（遊佐和敏『帆立貝式古墳』を元に作成）

に美作地方においての最終段階の埴輪としては、津山市中宮１号墳（註18）があり横穴式石室を有し、共伴する須恵器の最古型式は（TK10）～MT85である。

また、かつて隣接して存在していた２・３号墳は、本古墳に付随する陪塚的性格なものと考えられる（第２図参照）。２号墳は、直径10m程の円墳で円筒埴輪、家形埴輪、須恵器、鉄鏃が出土し、３号墳は直径12m程の円墳で円筒埴輪が出土している。出土した須恵器・埴輪については現在所在不明で実見はしていないが、文献記述などから推測して須恵器はTK23～47の時期と考えられる（註19）。

よって、大胆な推測ではあるが、２・３号墳を本墳の陪塚と考えれば、本墳の時期はこれら陪塚とほぼ同時期かやや先行する時期が考えられる。また、埴輪の特徴も先の才ノ峪１号墳や日上畝山古墳群同様２次調整のＣ種ヨコハケが見られる事などを総合的に考え、須恵器の編年で言えばTK23～47の時期、埴輪の編年ではＶ期の範疇で、おおよそ５世紀末～６世紀初頭が考えられる。ただ、本墳に伴う須恵器や副葬品などが明確でない以上、時期についての即断は許されないが、形象埴輪の盾の特徴などから推測して、その中でもより５世紀代に近い時期を考えたい。

周辺地域で調査された帆立貝形古墳（造出し付き円墳含む、第１表参照）としては、津山市六ツ塚１号墳（全長21m、木棺直葬４基、６世紀前半、註17）、津山市中宮１号墳（全長23m、横穴式石室、６世紀中頃、註18）、八束村四つ塚13号墳（全長23m、木棺直葬２基、６世紀前半、註20）などがある。これらはいずれも全長20m前後で本墳が35.5mであるのに比べると非常に小規模であり、周溝や外堤なども整なわず時期も６世紀代のものである。さらに県内において本墳と同規模な類例は、総社市随庵古墳（全長40m、竪穴式石槨、５世紀後半、註21）、笠岡市仙人塚古墳（全長43m、竪穴式石槨、５世紀後半、註22）などがある。これらはいずれも５世紀後半のものであることから、規模からだけの推測でも本墳が５世紀代に築造された可能性が大きい。ただ本墳の埋葬施設に関しては竪穴式石槨ではないので、これらより後出する可能性もある。

一般的に帆立貝と呼ばれている古墳の中には、前方後円墳の前方部が極端に短いものと円墳に方形の造出しが付設している両者を含んでいる。そのためこの両者を造出し部の規模（註23）と、それ以外に築成方法や円筒埴輪の配列の仕方、周溝の形態などから分類した考えもある（註24）。その後者の分類によれば本古墳は造出し付き円墳となるが、部分調査のため全容が不明でもあり、両者を区別する一致した見解がはっきりしていない現状のため、ここでの名称は「帆立貝形古墳」としておく。

いわゆる帆立貝形古墳は、岡山県内で約41基が確認され（第１表参照）全国的にみても広島県に次いで多い地域である（註24）。この県内の諸例から、ほぼ５世紀の古墳には鏡以外に甲冑や武具の副葬が目立つことから、５世紀においてかなりの規制下の元、軍事面で編成がなさ

れ、このような形態の墳墓の被葬者はその軍事を統括していた人物と推測される。その後特に美作地方では帆立貝形古墳は規模を縮小しながらも、6世紀へと受け継がれていったと考えられる。

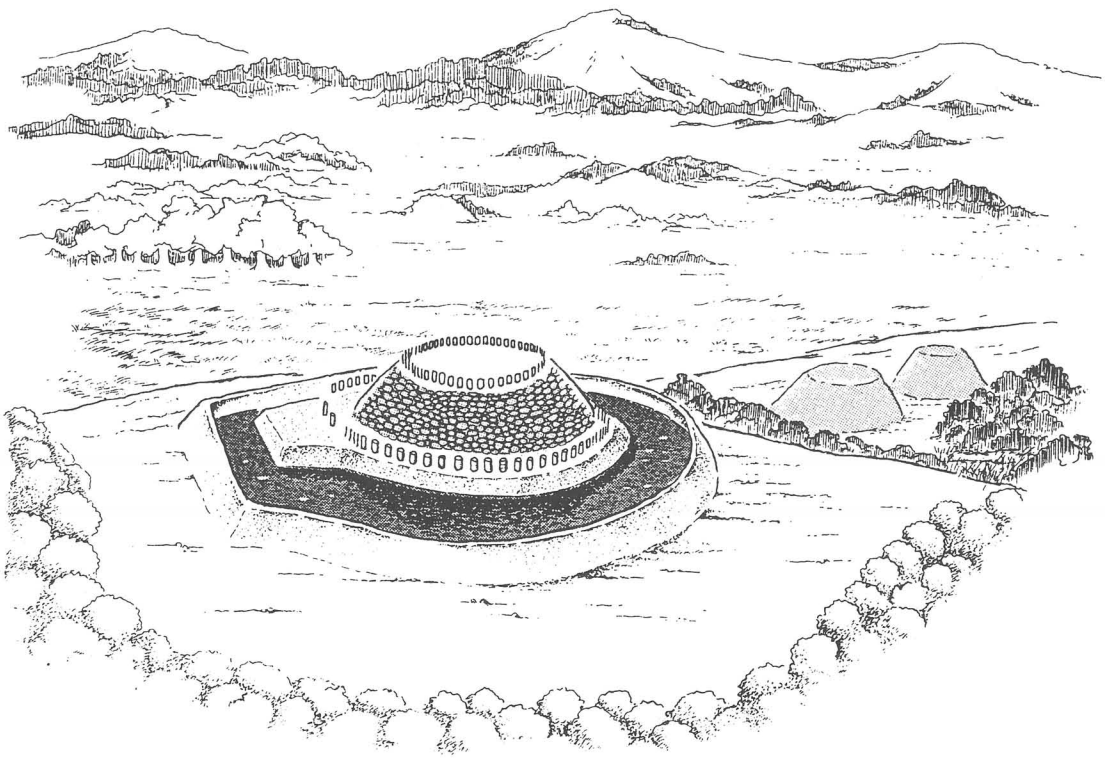
一般に、この類いの古墳がある程度限られた時期から造られている事から、そこに政治的な意図を模索する考えがある。これを5世紀の前半と後半のある時期に河内王朝の規制によって、帆立貝形・円・方といった墳形を採用するよう制約を受けたための現象としてとらえるもの（註25）、これとは別に一斉に規制を受けたものではなく前方後円墳を築ける首長と帆立貝形や大形の円墳とを築ける首長とは明確に区別され、後者の中に畿内との密接な関係を示す副葬品のセット関係が見られることから、この被葬者は軍事的に編成された人々で、中央から新たに派遣された人物ないしは地方首長が飛躍的に台頭した人物の両者と考えるもの（註26）とがある。また、周辺地域の三次盆地はこの帆立貝形の古墳が顕著な地域で、このことを鉄の掌握のために畿内と地域支配の再編成・拡充の中で造営された結果であると解釈し（註27）、特に三次盆地に出現する大形帆立貝形古墳の被葬者は畿内政権と密接に関係した新興の豪族層とする見解もある（註28）。また、美作地方では、5世紀後半以降は大形前方後円墳は造られず、水系毎に見ても帆立貝形が造られる地域は、6世紀代になれば蒜山地域などにあるものの5世紀代に逆上るものはそれほど多くはない。これ以外の地域では、小形の前方後円墳などが首長墳として水系を単位に地域ごとに展開することから、そのことを畿内政権による軍事面の再編成と、鉄など手工業生産の掌握に伴う地域内台頭者の出現による社会現象としてとらえ、その社会構造の再編成に伴い、本墳のような帆立貝形の古墳が突如として出現し、それに伴い美作地方では横穴式石室導入前の初期の群集墳が多数出現することから、この時点で在地首長層の身分の序列化が整い、それが如実に墓制に表現される結果となったと考え、そこに一つの社会変化の画期を求める見解もある（註29）。同様に美作地方において5世紀末の段階に畿内政権による古墳規制（軍事を機軸にした再編）を認めるものの、これに鉄の掌握を直接関連させない見解もある（註30）。

そして本墳の位置する加茂川流域では、全長40～50mの前方後円墳の正仙塚古墳（註31）や近長四ツ塚1号墳（註32）の系列以後、首長墳は規模もほぼ30m前後、墳形も帆立貝形や円墳に限られていることから、かなりの規制力が本地域にも及んでいる事が考えられる。その中での本墳の被葬者は、副葬品のセット関係については明確ではないものの、墳形のみならず周溝・外堤が整っている事などから先の三次盆地の見解と同様に、畿内政権との軍事面を軸とした密接な関係の中で派遣された人物の可能性をここでは指摘しておきたい。

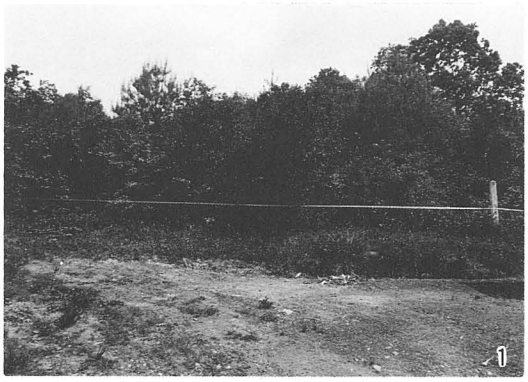
（註1）その多くは線刻によって、屋根の構造（網代など）を表現しているものと考えられる。
（註2）近藤義郎他『月の輪古墳』月の輪古墳刊行会1960
（註3）同志社大学大学院青柳泰介氏に御教示を得た。なお、青柳氏には形象埴輪全般について御教示を得た。
（註4）野上丈助『大阪府の埴輪』大阪府立泉北考古資料館1986

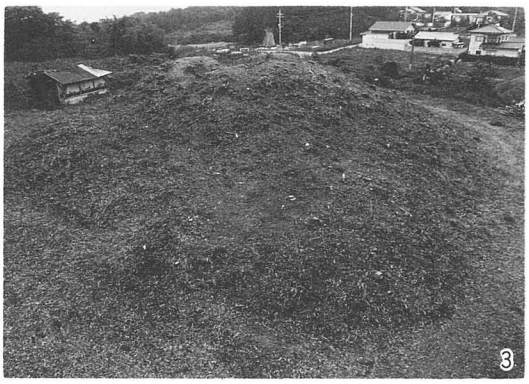
(註５) 伊達宗泰他「新沢千塚古墳群」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第39冊』奈良県立橿原考古学研究所1981
(註６) 西川宏「造山古墳」『岡山県史 考古資料』岡山県史編纂委員会1986
(註７) 高橋工「盾形埴輪の検討」『長原遺跡発掘調査報告Ⅳ』大阪市文化財協会1991
楠元哲夫「大和における盾形埴輪の系譜」『岩室池古墳・平等坊・岩室遺跡』天理市教育委員会1985
(註８) 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌 第64巻第２号』日本考古学会1978
(註９) 中山俊紀「才ノ峪古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第23集』津山市教育委員会1988
(註10) 田辺昭三『須恵器大成』角川書店1981
(註11) 行田裕美他「長畝山北古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第45集』津山市教育委員会1992
(註12) 今井堯「原始社会から古代国家の成立へ」『津山市史第１巻 原始・古代』津山市史編さん委員会1972
(註13) 平成５年度に岡山県教育委員会が発掘調査を実施。調査担当の桑田俊明氏に埴輪を実見させていただいた。
(註14) 島崎東「円筒埴輪ー中・四国」『古墳時代の研究９ 』雄山閣1992　円筒埴輪全般については島崎氏に御教示を得た。
(註15) 松本和男他「北山古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告４』岡山県教育委員会1973
(註16) 平成５年度に津山市教育委員会が発掘調査を実施。
(註17) 「六ツ塚古墳群調査略報」『津山市文化財調査略報３』津山市教育委員会1962
河本清「六ツ塚古墳群」『岡山県史 考古資料』岡山県史編纂委員会1986
(註18) 近藤義郎他『佐良山古墳群の研究 第１冊』津山市1952
(註19) 「河辺井口車塚２号墳・３号墳」『津山市文化財調査略報No.６』津山市教育委員会　また、出土地は不明だが本墳周辺の古墳から出土した須恵器もほぼTK23～47の時期である。今井堯他「吉備地方須恵器編年資料集成(１)」『古代吉備 第２集』1958
(註20) 近藤義郎他『蒜山原四つ塚古墳群 (改訂版)』岡山県八束村1992
(註21) 鎌木義昌他『総社市随庵古墳』総社市教育委員会1965
(註22) 鎌木義昌他『長福寺裏山古墳群』長福寺裏山古墳群・関戸廃寺調査推進委員会1965
(註23) 石部正志他「帆立貝形古墳の築造企画」『考古学研究 第27巻第２号』考古学研究会1980
(註24) 遊佐和敏『帆立貝式古墳』同成社1988
(註25) 小野山節「五世紀における古墳の規制」『考古学研究第16巻第３号』考古学研究会1970
(註26) 都出比呂志「墳丘の型式」『古墳時代の研究７』雄山閣1992
(註27) 桑原隆博「三次地域に於ける古墳の様相 (二)」『三次地方史研究第１号』三次地方史研究会1987
(註28) 古瀬清秀「備後の古墳」『吉備の考古学』福武書店1987
(註29) 小郷利幸「門の山古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第46集』津山市教育委員会1992
(註30) 安川豊史「古墳時代における美作の特質」『吉備の考古学的研究』山陽新聞社1992
(註31) 湊哲夫「高野山西正仙塚古墳」『津山市文化財年報１』津山市教育委員会1975
(註32) 『津山の文化財』津山市教育委員会1983
(註33) 今井堯「原始・古代社会」『美作町史編纂中間報告書』美作町史編纂委員会1964
(註34) 近藤義郎他「美作国鏡野町伊勢領大塚小塚について」『鏡野町綜合調査報告』鏡野町綜合調査団1958
(註35) 葛原克人「第五章 古墳時代前期」『岡山県の考古学』吉川弘文館1987
(註36) 村井嵓雄「岡山市一本松古墳出土の甲冑」『ＭＵＳＥＵＭ307号』1976
近藤義郎「一本松古墳」『岡山県史 考古資料』岡山県史編纂委員会1986
(註37) 和田千吉「備中国都窪郡新庄下古墳」『考古学雑誌第９巻第11号』日本考古学会1919
島崎東「備中榊山古墳採集の遺物について」『岡山県史研究第３号』岡山県史編纂室1982
(註38) 梅原末治「備中千足の装飾古墳」『日本古文化研究所報告９』1928
(註39) 葛原克人「総社市久米古墳群とその周辺」『岡山県埋蔵文化財報告１』岡山県教育委員会1971
(註40) 谷山雅彦「夫婦塚古墳・編笠古墳」『総社市史 考古資料編』総社市史編さん委員会1987
(註41) 高田明人「銭瓶塚古墳」『総社市史 考古資料編』総社市史編さん委員会1987
(註42) 鎌木義昌「総社市西山周辺古墳群」『総社市埋蔵文化財調査概報Ⅰ』総社市教育委員会1972
鎌木義昌「西山周辺古墳群」『総社市史 考古資料編』総社市史編さん委員会1987
(註43) 西川宏『吉備の国』学生社1975
(註44) 村井嵓雄「岡山県天狗山古墳出土の遺物」『ＭＵＳＥＵＭ250号』1966
西川宏「天狗山古墳」『岡山県史 考古資料』岡山県史編纂委員会1986
(註45) 中野雅美『箭田大塚古墳』真備町教育委員会1984
(註46) 正岡睦夫「岡山県赤磐郡山陽町森山・廻り山古墳における表採資料」『岡山県埋蔵文化財報告６』岡山県教育委員会1976
(註47) 梅原末治「岡山県下の古墳調査記録(二)」『瀬戸内海研究第９・10合併号』1957
(註48) 梅原末治「備前和氣郡鶴山丸山古墳」『近畿地方古墳墓の調査３』1938

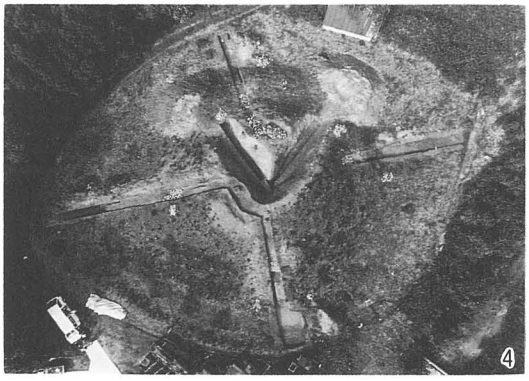
図　　版

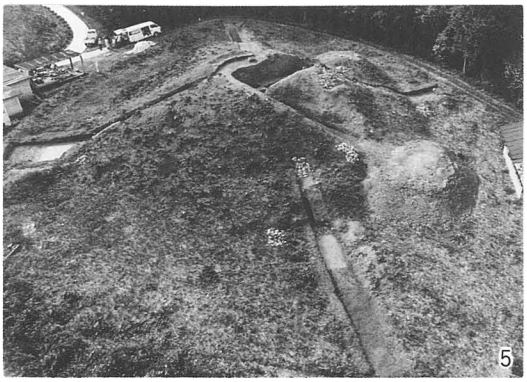


井口車塚古墳群復元想像図（カット：家元博子）

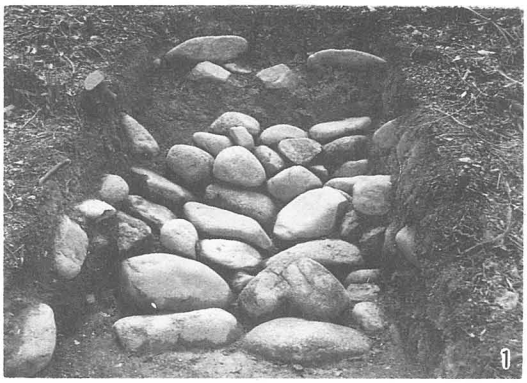


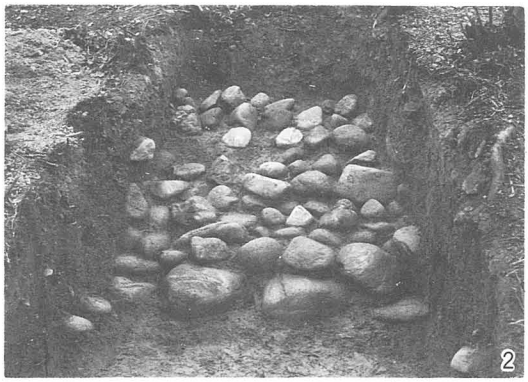


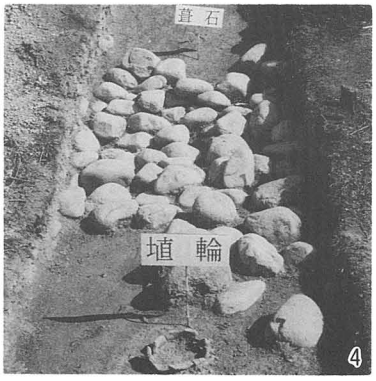


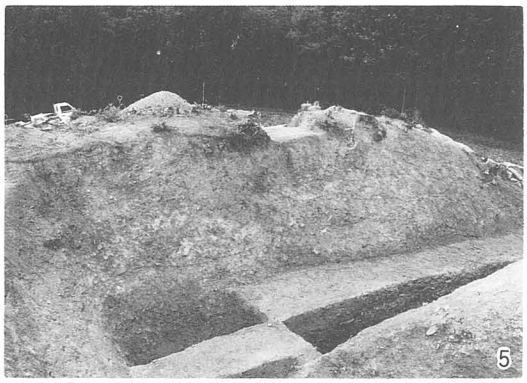


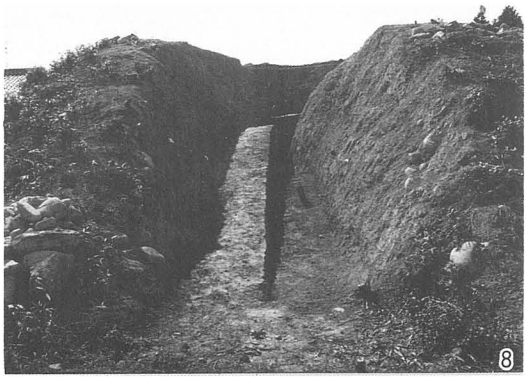
1．調査前(南西から)　3．樹木伐採後全景(西から)　5．全景(東から)　7．北トレンチ
2．樹木伐採風景　4．全　景　6．全景(北から)　8．北トレンチ葺石状況



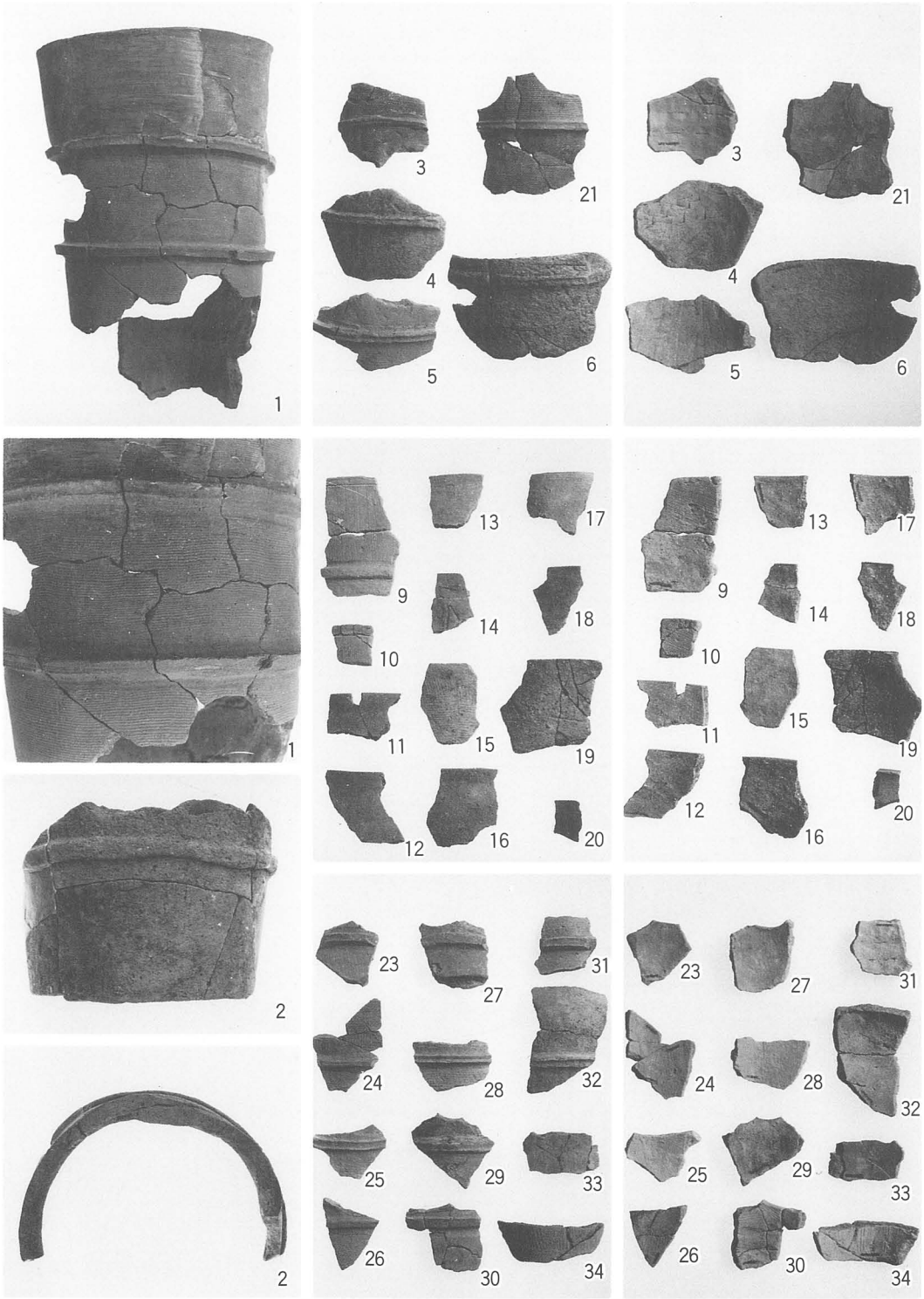




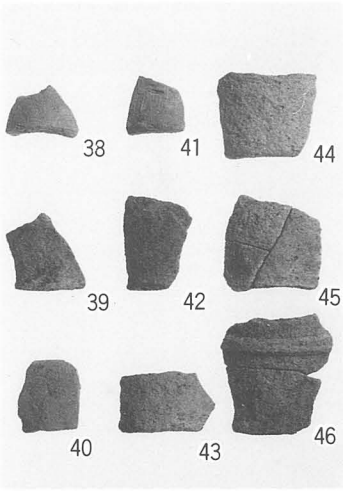


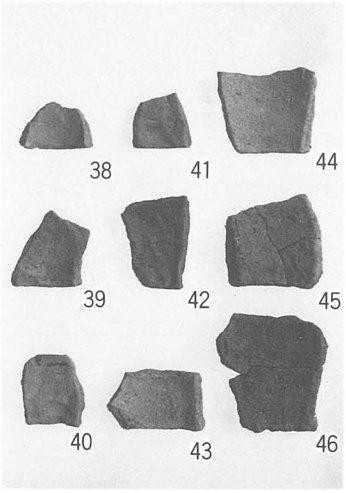


1．東トレンチ　　3．南トレンチ埴輪　　5．破壊穴土層(北西)　　7．破壊穴(北東)
2．南トレンチ　　4．西トレンチ　　6．破壊穴土層(北東)　　8．破壊穴(北西)

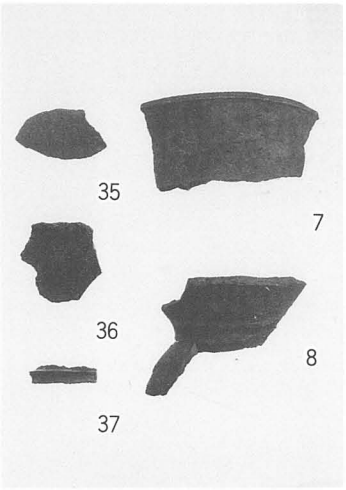

1
3
21
4
5
6
1
13
17
9
14
18
10
11
15
19
12
16
20
2
23
27
31
24
28
32
25
29
33
26
30
34
2

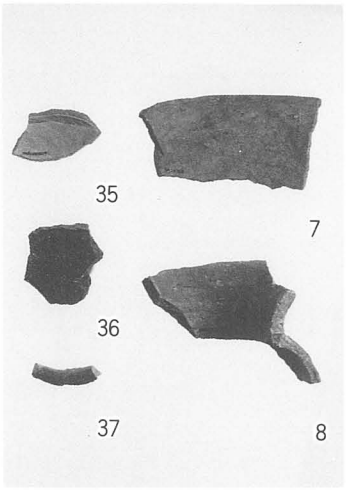
出土遺物（1）

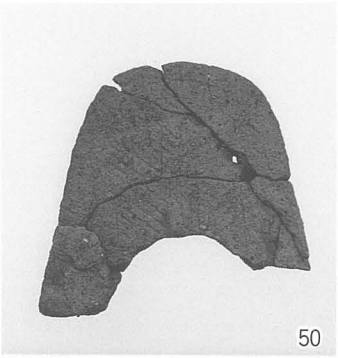

38
41
44
39
42
45
40
43
46

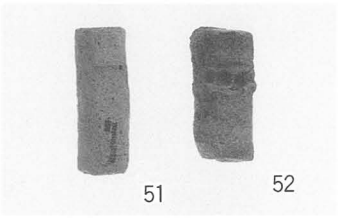

38
41
44
39
42
45
40
43
46

50

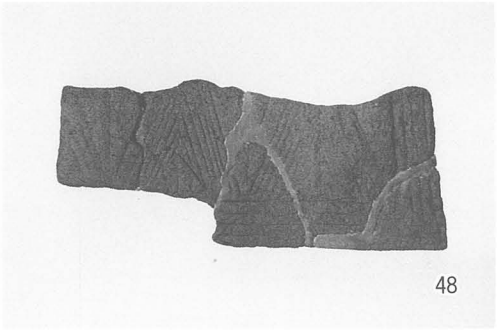

35
7
36
8
37


35
7
36
37
8


50

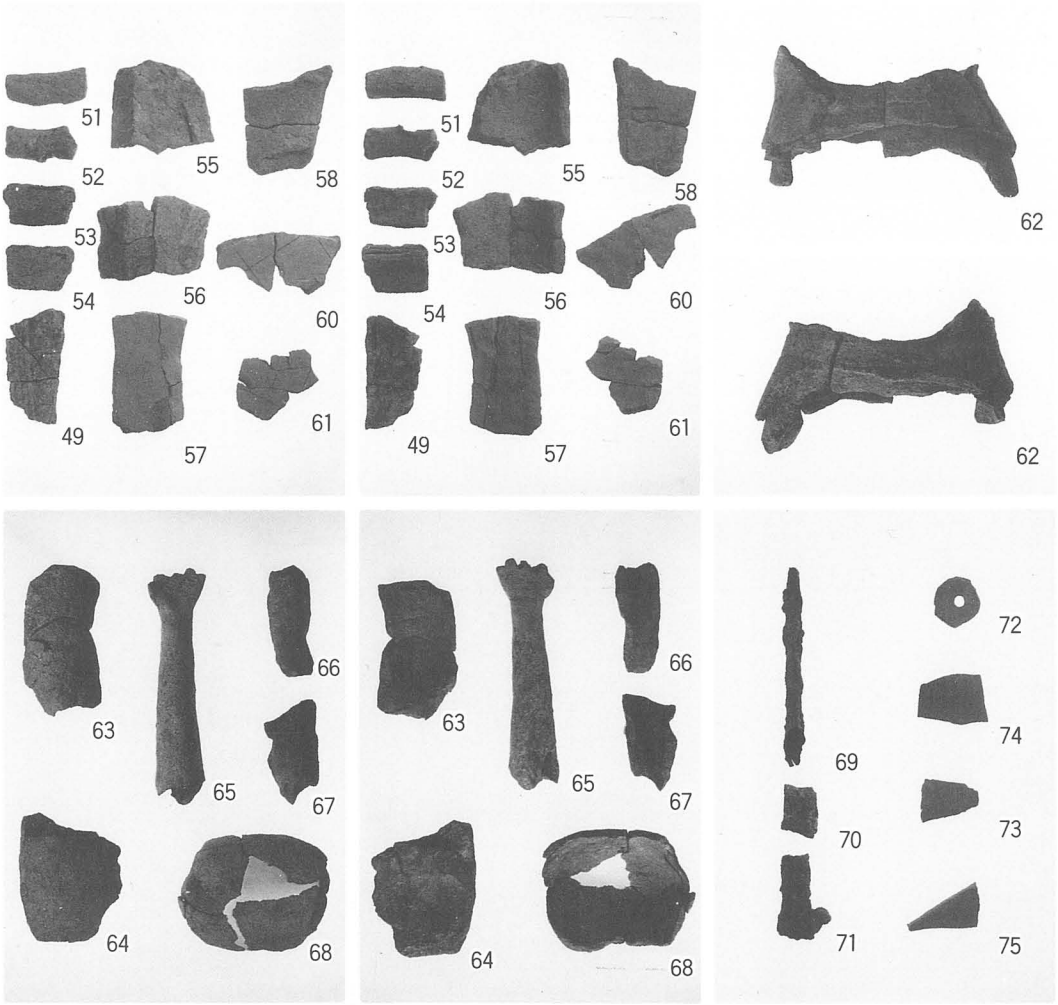

51
52

47


48

59

出土遺物（2）



出土遺物（3）

現地説明会風景

現地説明会風景

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第52集

井口車塚古墳

平成6年3月31日発行

発行　津山市教育委員会
岡山県津山市山北520

印刷　松栄印刷株式会社
岡山県津山市平福27-7